

ロバート・バートン
『憂鬱の解剖』
第3部 第2章 第5節 第5項
附序歌

岡村 眞紀子
伊藤 博明 訳

第5節 第5項

愛の憂鬱症の最後にして最良の治療法は
欲望を充足させること。

他の方策が効果を生じそうにないときに、究極的に施されるべき最後の避難所そしてもっとも
確実な治療法は、二人を共に歩ませ互いを楽しませること、「もっとも強力な治療は、その男を
愛する女に占有させること」、とグアイネーリオは〈『処方』〉第15章第15考察〈正しくは16考
察〉で言い、アスクレピオスその人も自分の病に対し、「恋する者に恋する相手を与える以上の」
良い治療法を見出すことができなかった、とヤーソン・ヴェン・デ・ヴェルデは言う〔『頭脳の病』
第19章〕。

二人は一つの新床で結ばれ

ラウィニアが花嫁として、麗しきアエネアスに与えられるべし。

彼らに婚姻の神ヒュメナイオスの血管に血を流させることが特別な治療法である、というのも愛
は過剰なものゆえ。だから可能ならば、あるがままにさせよう。

——望んだ喜びを愉しませなさい。

それをアルクラヌスはもっとも早く効く最良の治療と考え、サヴォナローラの究極な教え、主要
な絶対確実な治療法、最後の唯一の確実な逃げ場もこれである。

ユリア、あなただけがわれらの炎を消すことができる、
あなたは雪でも氷でもなく、火と等しくなりうるのだ。

[ペトロニウス 〈『サテュリコン』〉]

あなたがすべてをし尽くしたのちには、アヴィケンナが言うには、「二人の欲望や願望、慣習や法令にしたがって二人を結ばせるより早く効き安全な道はなく、それゆえ、我々は、骨と皮ばかりになっていた者が、欲望が満たされるや欲求不満が解消され、たちまち以前の健康状態に回復するのを見たことがある。ゆえに、これは不思議なことのようにではあるが、このような場合には、すべて自然に従うべきだと我々は考える」〔『医学典範』3. 1. 4. 22.〕「熱愛について」。古代の著作家アレテオスが『持続的病質の原因と徴候について』第3巻（正しくは第1巻）第3章で、若者の例を挙げていて、その男は、他のいかなる処方も功を奏さなかったが、すぐさま回復した。とすれば彼らを結婚によって結ばせるほか何が残ってようか。

そうすれば、こっそりと接吻を与え、
軽く噛み、身を絡ませて
暖めるのも許され、戯れるのも許される。

〔ジョヴィアーノ・ポンターノ『接吻』第1巻
「アッツィ・シンチェーロ・サンナザーロに」16-18.〕

そういう場合には、自分の祖先がしたように、接吻し、抱き合い、共寝し、互いの瞳に^{アイ・ベイビ}「姿」を見ればいい。そうすれば、とても長い間、求め望んでいた愛の喜びに満足できるだろう。

そして彼らは一つの寝床に共寝し、
唇を重ねて接吻し、
一つの安らぎのうちに眠りにつく。

〈同書 35-37.〉

然りであるが、このことは、「こちらに労苦、あちらには労働」〈ウェルギリウス『アエネイス』6. 129.〉とあっては、さまざまな多くの障害があって、いい具合に成就できることはない。ときには彼らが二人とも許されるとはかぎらない。両親、教師、先生、庇護者が同意しなかったり、法や慣習、規則が妨げとなったり、貧困、迷信、恐れや疑念が邪魔したりするからである。多くの男が一人の女にぞっこんになり、同時にまた女の方もその男に、あるいは複数の男にぞっこんになる。慎み深さを考えれば、心の内を白状したくはなく、愛しはしたいが、そのように言い寄ることはしてはならず、することもできない。彼女は、想いを知られたくはなく、感情を見せようとも、胸の内を口にしようともしない。〈リリの〉『ユーフェイズ』に見られるように、「黙して悲しみに死ぬか、口に出して恥にまみれて生きるかを迫られたとき、選ぶのは難しい」。エドワード4世の四女、美しいエリザベスが、あの若く気高き君、新王として迎えられたばかりのヘンリ7世への恋に落ちたとき、彼女は情熱的な言葉を発した。「ああ、私がああ素敵な若君に

ふさわしければいいのに。私の父上は亡くなり、こういうことを先に進めてくれる友達が必要なのです。何と云えばいいのでしょうか。私は独りぼっち、誰に心を打ち明けるつもりもありません。母上にそれを打ち明ければどうかしら、恥ずかしくてそんなことはできません。どなたか殿方に話してみてもどうかしら、その大胆さはないわ。ああ、誰かに相談するだけでもできれば、おそらくその方のお話では、私の想いを露わにしてくれる言葉を滑り出させることができるでしょう」[スピード『グレート・ブリテンの歴史』(9. 20.) ベルナル・アンドレの手稿に依拠]。どれだけの慎み深い侍女がこのことに関心をもつでしょう、私は貧しい侍女、私はどうすればいいのでしょうか、父無し子で、財産もありません、私は快活で豊満、若くて澁刺、でも誰からも求愛を受けたことはありません。愚かな男たちは、私が彼らを求めにやってくるのを待っているのです [(ロハス)『セレスティーナ』バルト訳『ポルノボスコディダスカルス』第19幕]。彼女が言ったことには、愚かな男たちは、先に私が求愛し声をかけるべきだとでもいうかのように眺めていて、自分たちから求愛したくてもできないのである。

——どんなふうにも口火を切ればいいのだろう。

[ウエルギリウス『アエネイス』4. (284.)]

ただただ受け身的で、何か知らないが、多くの障害や不都合があって自分から求愛できない。そういう場合、どうすればいいのか。「わが敵フォーチュン」でも歌うか——。

古代ローマ人、当代のヴェネツィア人、オランダ人やフランス人など、このバラッドのようなことに、おおいに関心を抱く人たちもいるので、もし、一方は高い身分、他方は低い身分の二人がとても愛し合ったなら、法律のもとで結ばれることはできないが、それでもほかの点、年齢、運命、教育、そしてあらゆる良き情愛においては平等である。ドイツでは、三代にわたって生まれの良さを証明できない限り、彼らは結婚することを潔しとしない。高貴な者は高貴な女性と、男爵は男爵の娘と、騎士は騎士の娘と、郷紳は郷紳の娘と結婚しなければならない、スレート職人が、住む者の身分や家系に応じたスレートを選ぶのと同じである。もし、女性が金持ちでなく美人でもなく、あるいは教養がなければ、彼女は見棄てられることとなった。未亡人を、スペイン人は毛嫌いし、トルコ人は、25歳を超えていけば年増と評する。しかしこれらはあまりに過酷な法であり、厳格な慣習である。愛には与えられるべきものがあって然りである。我々はみなアダムの息子であり、先のようなことは自然に反し、そうあるべきではない。再び言うが、男がどうにも抑えられないほど愛し、女が愛していない、あるいはその逆のこともある。パンはエコーを愛し、エコーはサテュロス、サテュロスはリュダを愛した [モスコス『牧歌』5. のギリシア語に依拠]。

彼ら自身の中には愛してくれる人を嫌う者がいるのと同様、
その者自身は愛しているながら嫌われることがある。

〈モスコス『牧歌』5-6〉

彼らはあらゆる面を愛し、かつ嫌う。彼が彼女を愛すれば彼女が彼を嫌う、そして彼が彼女を嫌えば彼女が彼に惚れ込む、という具合に。クピドは2種類の矢を持ち、一方は全体黄金でできていて、鋭く、愛を強要する。

——（愛を）起こすものは黄金である。

[オウィディウス『変身物語』1.〈470.〉]

他方は鈍く、鉛でできていて、愛を妨げる。

——こちらは愛を避けさせ、あちらは愛を引き起こす。

〈同書 1.469.〉

われわれの日常の経験で、このことが実証されるのを眼にするのはしばしばである。コロソスのかの乙女カリュルホエを深く愛したが、彼が彼女を愛すればするほど、彼女は彼を嫌悪した。オイノネはパリスを愛したが、彼は彼女を拒否した[パウサニアス〈『ギリシア案内記』「アカイア地方」第7巻.〈21.1.〉]。彼らはあらゆる点で強情で、それゆえまるで美は壊れるべく、あるいは壊されるべく創られたかのごとくである。私は彼女に、あらゆる限り仕え、あらゆる敬意を払い、頼み、懇願した。「優しい方、どうか私に憐れみを向けてください」[ウエルギリウス『アエネイス』6.〈117.〉]。私は、彼女の好意を得るために、私自身も私の時間も友も富も注ぎ、(彼[エラスムス]が『牧歌』[「ガラテアへ」]で歎くように)、彼女に対して悲しみ、溜息をつき、涙し、嘆くけれど、彼女は火打石のように硬い。

——〈トラキアの〉イスマロスの岩より動かない——

〈『牧歌』[「ガラテアへ」]103.〉

彼女は、金剛石のように美しく硬く、決して敬意を払わず、「私はあなたに蔑まれる」〈ウエルギリウス『牧歌』2.19.〉、それに耳を傾けてもくれない。

——呼ぶ私から彼女は逃げる、

私の涙に憐れみもかけず、嘆きにも傾かず。

〈エラスムス『牧歌』101-2.〉

私はどうすればいいのだろう。

私は彼女に求愛した、若き男が為すべきように、
だが、彼女は言った、貴方、私はあなたを愛してはいませんわ。

岩よりも、大理石、鉄よりも、樫よりも、巖より、
洞窟、角、金剛石よりも、冷氣よりも硬いわがカエリア。

[アンジェリアーノ『エロトパイグニオン』〈「カエリアの婚資」5-6.〉]

私は贈り物を与え、餌として渡し、送りもしたが、それらは拒まれた。

田舎者だな、コリドンは。アレクシスは贈り物など気にもかけない。

[ウエルギリウス〈『牧歌』2.56.〉]

私は抗い、誓い、泣く、

——彼女は愛に嫌悪で、
涙に嘲笑で応えた——

[ジョン・リーチ〈『葡萄栽培者の牧歌』2.17-18.〉]

彼女は何に対しても私を無視し、愚弄し、蔑視し、嫌悪し、フィリダは私を嘲り、エウリディケは、岩や、獣、樫よりもなお硬く、粗野で、冷酷。

良家の女性は気難しく、それゆえ求婚者の誰をも軽蔑し、哀れにも恋人を責め苛み、誰をも自分たちに相応しく優れているとは考えず、ダプネのごとく、えり好み激しく自分だけを愛するというのは、非常によくある事実である。

たくさんの男たちが彼女に求愛したが、彼女は求愛者たちを蔑んだ、
結婚が、恋愛が何なのかも、結婚生活が何かも、彼女には関心がない。

[オウィディウス『変身物語』1.〈478, 480.〉]

少なくとも彼女らが言っているように、彼女らは一人の男とは結婚しようとせず、(それ以下のことは何も望まないゆえ) 別の人とはしばらくはまだ結婚せず、その状態であることが唯一の彼女らの望みなら、彼女らはそれを固持する。彼女も最後には結婚するだろうが、その相手は彼ではない。彼は本当に礼儀正しく、教養ある男なのだが、財がない。彼女に求愛している別の男には財があるが、才がない。ある男は年を取りすぎているし、もう一人は若すぎて、醜男、その身のこなしを彼女は好かない。三番目はだらしない傾向があり、裕福ではあるが身分が卑しい。彼

女は、貴婦人になるつもりなのである、彼女の姉や母がそうであるように。彼女は抜きんで美しく、育ちが良く、持参金もたっぷりあって、マティルダやドリングのような縁組を探しているのである。さもなくば、このままでいようと決めている。若い娘というものは、とにかく、あらゆることに躊躇し、つまらないものにすぐに夢中になったり飽きたりし、すぐに気持ちが逸れ、なかなか喜ばないものである。そうこうしているうちに、どれほど多くの恋する男たちを拷問にかけたことか。ある者は、恋にやつれ果て、憔悴する。どれほど多くの男たちを、ついには死に追いやることか。別の男は溜息をつき悲しむが、彼女は構いはしない。ストロツィはアリアドネに対してこのことに反論した。

エウリュアロスの嘆息と涙で、あなたが心を動かされることはない、
逆巻く海の波頭が懇願によって変えられることがないにもまして。
あなたは、町中でより美しい者が誰もいないという若者を蔑み、
その男を愛ゆえの狂気と死に追いやる。

[〈ストロツィ（父）』『エロティカ』第2巻〈「いとも美しき娘アリアドネへ」7-8, 21-22.〉]

彼女たちは誇りをもってめかし込み、若者を恋に陥れる。

——男たちを魅惑し、囚われた男たちを撥ねつけ、

[トマス・ホップス]

男たちが彼女たちに溺れ、彼女たちゆえに正気を失う。

——だが、彼はいかなる涙にも心動かさず、
いかなる声にも動ぜず、耳を傾けることもなし。

[ウェルギリウス『アエネイス』4. 〈438-39.〉]

彼女たちは不承不承好意を見せる、
彼女たちは愛されることを愛でるが、愛してくれる男を蔑む。

〈ダニエル「ロザモンドの歎き」538-39.〉

いかなる求愛も奉仕もすべて物足りず、あまりにも卑小に見える。

——自分を愛する者を苦しめ、
食い物にすることを、彼女は愉しむ、

〈ユウエナリス『諷刺詩集』6. 209-10.〉

アタランタのごとく、彼女たちも追いこされなくてはならず、勝ってはならない。若い男たちの多くは、強情で、自分の選択には入念で、専制君主のように尊大で、横柄、欺瞞的で、信義なく、一方ではまた確として気難しい、ナルキッソスのようである。

多くの若者が、多くの娘が、彼を求めた、
だが、華奢な姿には、かくも酷い尊大さがあったので、
若者たちも娘たちも、誰も彼を求めなかった。

[〈オウィディウス〉『変身物語』3. (353-55).]

エコーは泣き崩れ、あらん限り必死で彼に懇願した。哀れみで私を愛してください、さもなければ愛で私を哀れんでください、と。しかし彼は頑なだった。

彼は言う、私があなたのものになる前に、私は死ぬだろう。

[オウィディウス『変身物語』3. 391.]

プシュケは哀れっぽく泣きながら、クビドを追いかけた。

美しいあなたを、あなたの美しいプシュケが必要としています。
女神があなたという神を、乙女が少年を求めているのです。

[フラカストロ『魂についての対話』]

しかし、それにもかかわらず、彼は彼女を拒絶した。こうして、多くの恋する者たちはきわめて長い間、お互いに熱愛し続けるが、自らが邪魔だとして、ついには軽蔑され拒絶されることになる——ストロツィのガルジリアーナのように。

若者も老人もおまえを嫌い、おまえは見棄てられ衰弱している。

おまえは、かつて、指導者たちの公然の慰めだったのに。

[〈エルコレ・ストロツィ「ガルジリアーナに」]

ナルキッソス自身がそうであったように、

——多くの者をひどく嫌いながら、
彼は誰の愛も享けることなく死んだ。

[〈マーロウ『ヒアロウとレアンダ』1. 75-76.)]

彼が自らの影から蔑ろにされたように、彼女たちも他の者たちから自身が蔑ろにされ始め、そして、若い頃には素晴らしい良縁を選ぶことができかもしれないのに、最後には貧しい牧師や老いた従者と懇ろになる。それはプルタルコス[『愛をめぐる対話』〈9.〉]における鷹揚な雌馬と同様で、この雌馬は卓越した雄馬どもにしか身を許さなかったのだが、尾を切られ、たてがみを切り詰められ、水を飲もうとやってきてそこに映った不恰好な自分を見ると、「驢馬に乗られるままに身を委ねた」。しかしこのことは、一般的な気質であって、取り去られることはないだろうし、助けることもできない。

私を欲しない彼女を私は欲し、私を欲する彼女を私は欲しない。

ウェヌスは魂たちを打ち負かそうとするが、満足させようとはしない。

[アウソニウス〈『エピグラム集』56.1.〕]

彼らの愛は輪の中で踊る。そしてクピドは彼らを追い求め、彼は溺愛し、また溺愛される。

彼は追い求め、追い求められ、そして火をつけて、燃え上がる。

〈オウィディウス『変身物語』3.426.〉

彼らの情愛が一致することはありえない。しばしば彼らは和解することができるが、和解しようとはしないで、彼ら自身の愚かな行動が全てを損なう。彼らは自分自身をあまりに疑い、すぐに気落ちしてしまう。ところで、彼女が裕福であなたが貧乏だと、彼女が若くてあなたが老人だと、彼女が愛らしく美しく、あなたがきわめて不快で醜悪だと、彼女が気高く、あなたが卑しいと、彼女が良い身なりで立派で、あなたが醜い道化だということか。絶望することは何もない。まだ十分に望みがある。「ニューサはモプススの妻になる。我々恋する者たちで望まないものがあるだろうか」〈オウィディウス『牧歌』8.26.〉。あなたは自分自身をもう一歩前に押し出さない。というのも、ありそうもない結婚がこれまであって、そして毎日為されているのだから、結末がどうなるのを見なさい。多くの者が薔薇を捨てて薊を集め、蜂蜜を嫌って酸味果汁を愛し、われわれの嗜好はわれわれの味覚と同様に千差万別である。しかし、普通彼らは機会を逃し、「接吻を奪った者も……」〈オウィディウス『恋の技術』1.669.〉、いつもの手段と時を逸する。

できるときにしようとしなない者は

しようとする時に何も得ないだろう。

〈ハイウッド『エピグラム集』第7番〉

彼らは言い寄られ、求められ、また求愛されることを期待する。ほとんどの場合、彼らは望んで

もできないが、それは上述の理由のためか、相思相愛になって、まったく似たように身を捧げる多くの求愛者がいるためである。そして、一人の者だけが成功すべきところで、残りの者たちはどうなるのだろうか。ヒアロウは多くの者たちに愛されたが、一人だけが彼女を享受した。ペネロペには一群の求愛者がいたが、その全員が自らの目的を逸した。このような場合、彼あるいは彼らは賢明に、用心深く自分自身を落ち着かせ、先に述べた規則によって自らの情感を鎮めなければならない。

——愚かな火は振り払いなさい。

[オウィデウス『変身物語』9. (746.)]

彼の想いを逸らしなさい。あるいは敢然と、それを取り除きなさい、トゥルヌスがおこなったように。彼は、彼女を得ることができなかったとき、ある種の英雄的な軽蔑をこめて、「ラウニニアはおまえの妻だ」〈ウエルギリウス『アエネイス』12. 937.〉と、アエネアスに彼女を娶ることを命じ、あるいは、穏やかに別れを告げて、彼女を行かせる。

——おまえはピュリスを独り占めしてよい。

〈ウエルギリウス『牧歌』3. 107.〉

彼女をあなたに取らせよう、神が貴殿に喜びを与えるのだから。寓話における狐は、葡萄を食べようとしなかった。しかしなぜだろうか。その理由は、狐は葡萄を取ることができないからだ。あなたは、得ることのできないものに心を悩ませてはならない。

このような多くの不都合、妨害、邪魔が存在しており、それらが彼らの企てを挫き、哀れな恋人たちを苦しめるのであり、ときには容易に取り去ることができるが、ときには、やはりそれができない。しかし、彼らはすべてが協和しており、今のところ合致していると仮定しよう。この愛や好意は二人の間だけに存在し、双方ともに深く満足しており、そこに相互的愛と多くの情愛が存在すると想像しよう。しかし、彼らの両親、庇護者、教師は同意することができず、したがってすべてが挫折する。その縁組は不釣り合いである。一方は富裕で他方は貧乏である。厳しい父、頑固で、残酷で、貪欲な父は、多大な金銭を得ることができないならば、自分の息子を結婚させないだろう。クリュストモス [『説教』5、「テサロニケの信徒への手紙一」第4章第1行について] が記しているように「彼らはすべて金銭で気が狂っている」。また、彼が自分の娘を結婚させないならば、それは彼女の持参金を節約するためであり、あるいは、娘が彼におこなっている奉仕のゆえに彼女を手放すことができず、生きている間は何ものも、一ペニーでさえも手放さないと決心しているからである。おそらく彼は与えることができるのだろうが、彼が死ぬまではそうしないと決めていて、彼が死ねば金銭の壺を割って、しきりに欲しがっていた者たちの間で分けられるのである。あるいはまた、彼は娘の身を整える財を欠いており、お金がなく、そし

て、そのことが彼女の身体と魂の健康を明らかに害するにちがいがなくとも、そのことに彼は気に留めず、知ろうともせず、彼女は待たなければならず、待つことになるだろう。多くの怠惰で不注意な親たち、不公平な親たちは〈テレンティウス『自虐者』213.を参照）、自らの子どもたちの情感を自分自身の情感によって測り、今となっては冷たく、老いぼれて、このような若々しい想いはすべて消え去り、そして彼らは、自らの子どもたちの才能を凍死させ、「子どものときから老人に生まれ」[テレンティウス]〈同上234.〉させる。彼らは結婚させないにちがいない。「彼らは若さが自らもたらす事柄には何の関心も寄せず、かつてあったのではなく、今ある自らの欲望に支配されている」〈同上215-16.〉。彼〈テレンティウス〉がその喜劇の中で述べているように、子どもたちは自然本性を窒息させ、彼らの若い血は若々しい快樂に与ってはならず、突然、親たちがそうであるよう老いなければならない。それが自らの子どもを娶せるときの、ほとんどの親たちの一般的な誤謬である。父親はすべからず財産を敬い、自分自身の愚昧、放蕩、無分別によって遺産を使い果たしたときには、自らが立ち直るために、年長の息子たちの愛と情愛を阻害して、金銭のために愚か者か老女か醜い者に売り渡す。

ファノクラテスの娘と、あの赤毛の娘と、

眼が灰青色で、口が大きく、鉤鼻の娘と結婚するだって——。

[テレンティウス『自虐者』最終場〈1061-62.〉]

そして、その喜劇のクリトフンのように、彼の息子は本当に嫌がる。「僕にはできません、お父さん」。もし彼女が裕福だったら——（彼は答える）「やれやれ、なんと好みがうるさいやつだ。おまえは、ここに意志があると思っているのだろう」〈同1063.〉——彼は彼女を娶るにちがいないし、そうするだろう、彼女は十分に美しく、十分に若いからだ。もし彼が父の土地を相続することを期待し、願っているならば、彼が愛する時と者と、アルコニデスの娘とではなく、彼の父の命じる者と、父の好きな時と場所で結婚し、彼の愛情は父の機嫌を伺うだろう。彼の娘もたしかに、同じ苦境にいる。というのは、彼女は空の小舟のように、彼女の父が望むものを、望む場所へ、望む時に、望む者を運ばなければならないからである。こうして、これらの用務において、父は常に最大の有利さを求める。しかし母は良い親族を重んじ、ほとんどの場合、息子に相応しい女性を重んじる。これらすべてをリウィウスは〈『ローマ建国以来の歴史』〉第4巻第1論〈正しくは4.9.45.〉で例示しており、紳士と郷土は、ローマでは（貴族と平民は結婚してはならないという法律に反して）田舎娘に求愛したが、その問題は論争の的だった。紳士は母の意見によって好まれた。「彼女はできるだけ立派な配偶者を娘と結婚させようと望んでいた」。彼女は自らの娘を、あらゆる手段を用いて淑女にさせたかったのだろう。監督者たちは、もっとも財産のある者を支持した、等々。しかし、両親は次の点に関してはあまり厳格であるべきではない。美はそれ自体、すべてを充足する持参金であり、「美しい乙女は、きわめて貧しいとしても、豊かな持参金を与えられている」[アプレイウス『弁明』〈92.17-18.〉]。そのようにして、ラケルはヤコブ

と結婚した〔『創世記』29.〕。そして、ボナヴェントゥラは『命題集』第4巻〈30. 3. 6.〉において、「美しさゆえに乙女と結婚する者が小罪を犯すことになることを否定している」。『申命記』21. 11. によれば、ユダヤ人たちは、捕虜たちの中に美しい女性を見初めたとき、ある小さな儀礼が守られるのならば、彼女を妻に娶ってもよかった。とりわけ緊切な理由や重大な障害がなければ、彼らはこの種のことにあまり厳格でなかったはずである。プラトン〔『法律』第6巻〈773A.〉〕が主張しているように、婚姻のさいに、「若者たちが貧しい民衆との姻戚関係を避けるべきでなく、富裕者を追い求めるべきでないことは」国家にとって善いことである。貧困と卑しい家系は、他の多くの特質、謙遜、徳、宗教、優良な教育によって十分に補うことができるだろう。「私は告白するが、私は貧しい、だがそれゆえに、私は劣っているのだろうか、そして惨めな者なのだろうか。アモル自身は裸体であり、三美神も星辰も同じで、ヘラクレスは獅子の皮をまとっている」〔ピロストラトス『書簡集』〈7.〉〕。けっして金銭ではなく、徳、愛、知恵、親切心、美、人物を重視しなさい。さらにあなたは、「愛は強いられることができない」ということを考慮しなければならない。彼らは愛しうるがままに愛するにちがいない。「衣服が隠している部分を運命が支配する」〔ユウエナリス〈『諷刺詩集』9. 32-33.〉〕。諺にあるように、結婚と絞首刑は運命によって定められている。婚姻は天において計られる。

愛するの嫌うの我々の権能のうちにはない。

というの、我々の意志は運命によって支配されているからだ。

〈マーロウ『ヒアロウとレアング』1. 167-68.〉

アリスタエネトス〔『恋愛書簡集』〕において、ある侍女が彼女の女主人のお気に入り恋したが、そのことを知った女主人は、嫉妬によって狂乱し、彼女の頭髪をもって家中を引きずり、彼女を苦痛で苛んだ。その少女は叫びを上げた。「奥方様、運命が私の身体をあなたの僕にしましたが、私の魂はそうではありません」。愛情は自由なものであり、命じられるものではない。さらにはおそらく、彼らの野心、高慢、貪欲を抑えるために、また一族の遺伝的な疾病を直すために、神はその義しい判断によって、果たされるべき婚姻を割り当て、許したのである。というのは、私はプラトン〈『国家』546.〉やボダン〔『共和国論』〈4. 2.〉〕と同意見であり、一族は王国と同様に自らの限度と期間を有しているからである。彼らは、残存し継続しても、六、七百年を超えることはないだろう。そのことは数多くの例によって示されており、ポウカー〈『予言の一般的規則について』1.〉とメランヒトン〔『カリオンの年代記』註解〕も確証している。しかし、(騎士、紳士、郷士の多くの系図から分かるように) 永続的な特質を有して、始まったときと同様に、多くの世代を経てもほとんど変わらない一族もある。しかしながら、私は言うが、彼らには若さを、愛を重視させよう。彼らは、自らが指名する者たちを想い描くことができると考えてはならない。「なぜなら、愛は命じられることなく、愛情は自由で、何か別のものや反対のものを要求するからだ」〔〈小〉プリニウス『賞讃演説』〈85. 3.〉〕。これは自由な情念で、プリニウスが彼の『賞讃』

演説』で述べているように、強制されることはできない。諺にあるように、愛は愛することを熱望する。それは相互の愛情を、照応関係を必要とする。「愛は無理には与えられず、また奪われない」。それは学ばれることができない。オウイディウス自身は我々に愛する方法を教えることができない。それをソロモンが述べることも、アペレスが描くことも、ヘレネが表わすこともできない。したがって、彼らは無理強いし、また強制すべきではない。「というのは、(ファビウス[〈クインティリアヌス〉]『小演説集』306.〈現行では157.10.〉)が主張しているように)誰が他人の想いによって愛することができるだろうか」。しかし加えて、強いられた結婚の悲惨さを考えてみなさい、若者に哀れみをかけなさい。そしてとりわけ、嫁がせる娘をもつ者たちはたいへん注意深くあり、然るべきときに彼女らを結婚させるように備えておかなければならない[レメンズ〈『教戒』第54章〉。『シラ諸(集会の書)』第7章第25行は、然るべきときに娘を分別のある男と結婚させることを、「果たすべき重要な事柄」と呼んでいる。レメンズが〈『自然の隠された驚異』第1巻第6章で勧告しているように、多くの疾病を防ぐために、「乙女は時宜を得て嫁がなければならない」。それについてはロドリゴ・デ・カストロが『婦人病概論』第2巻第3章で、またルイス・メルカドが『婦人病論』第2巻第4章「処女と未亡人の憂鬱症について」〈さらに第1部第1章第3節第4項を見よ〉で詳しく議論している。したがって、これらの致命的な疾患を避けるために、他の大きな不具合を防ぐためと同様に、また私が加えて知っている事柄のために、折を見て彼女たちに夫を得させることが良いことである。クリュソストモス[『説教』第5番、「テサロニケの信徒への手紙一」第4章第1節について]が助言しているように、「結婚の時と年齢が到来したときには」、彼女たちの結婚を遅らせてはならない。さもなければ、彼女たちはおそらく別のときに結婚し、より悪い結婚となるだろう。しかし、もし法律家のネヴィッツァーノが強く求めないならば、彼女たちが婚期を過ぎてから結婚するのは正しいことになるだろう。というのは、彼が『婚姻の詩歌集』第2巻第30番〈正しくは36番〉において、クルティウスと他の幾人かの市民法家から証明しているように、「25歳を過ぎた乙女は、彼女の両親の同意なしに、彼女とは不釣り合いで、彼女よりも劣るような者と結婚することができ、そして彼女の父親は法律によって、然るべき持参金を彼女に与えるように強いられる」からである。ところで、私のことを誤解して、私がここで強情で、手に負えない、気まぐれな娘たちを弁護しているとは考えないでいただきたい。私は、聖アンブロシウス(『創世記』第24章第25節註解)が、レベッカの結婚について書いていることに同意する。「女性は夫の選択を両親に任せるべきである。それは、彼女が自分自身の責任で選択して、生意気で淫奔な女であると評されないためである。というのは、女性は、自分自身が男性を欲するのではなく、男性から欲せられるように見えるべきだからである」〈アンブロシウス『アブラハムについて』1.9.91.〉。私は、(慎しみ深い乙女たちのために)、あまり怠慢で、彼女たちの然るべき時と豊穰な年月に無頓着である、あの厳しい親たちに対してだけ、クルティウスの述べたことを言い返したい。真実を言えば、彼女たちがさらに遅れるならば、時宜を失い、誰も彼女たちに気に留めないだろう。今日の我々において、イタリアの女性は(アレティーノのルクレティアが述べるように〈正しくはアントニアの台詞〉)24歳で「す

でに老いており、最高の時期を逸し、顧慮の余地はない」〈『ナンナとアントニアの対話』バルト訳『ポルノディダスカルス』〉。老いた男性は、リュシストラテがアリストパネス〔喜劇『女の平和』〈595〉アンドレアス・ディヴィス訳〕において告白しているように、「たとえ白髪になっても、生娘と結婚できる」。老いた男性が若い娘と結婚するのは珍しいことではないが、しかし彼が続けて言うように、「女性の好機は短く、もしそれを掴まなければ、誰も彼女と結婚しようとはせず、彼女は待ちながら座っている」〈『女の平和』592-93〉。誰が老女を気にかけるだろうか。彼女はそのまま衰えていくのだろう、等々。詩人が語るように、処女は「好色で早熟の生娘」で、ある花、突然萎れる薔薇に似ている。

エオス（曙）は光り輝いて、生まれるものを見たごとく、
夕方遅く戻るときには、老いたものを見た。

[〈擬〉アウソニウス『牧歌』14. 〈45-46.〉]

彼女たちは、可能なときに時を掴めよ、若さを利用せよ。そして、彼が命じているように、

乙女よ、花が新鮮で、新しく瑞々しいうちに薔薇を摘みなさい、
そして、この薔薇のように、お前の年齢が急ぎゆくことを覚えておきなさい。

[同書 〈49-50.〉]

我々はすべて愛そうではないか、「力と年齢が許す限り」〈オウィディウス『恋愛術』2. 669.〉、我々が花開く年齢にある限り、恋愛事に適する限り、そして時が味方してくれる限り。というのは、

太陽は昇り、沈むことができるが、
我々には、ひとたび短い光が消え去れば、
眠るべき夜が永遠に続く。

[カトゥルス 〈『詩集』5. 4-6.〉]

太陽は沈んでもまた昇る。
だが、ひとたびこの光を失うならば、
我々には夜が永遠に続く。

[ベン・ジョンソン訳 〈『ヴォルポーネ』3. 7. 171-73. および『森』5.〉]

「時間は飛び去ると呼び戻せない」〈ウエルギリウス『農耕詩』3. 284.〉。しかし我々はこの勧告を必要としないし、我々はすべて、たいていは性急すぎる。だが、もし逃れる策があるならば、すべてが起こるべきようにならないならば、ディオゲネスが、息子が罵ったとき、彼を正しく教

えなかったがゆえにと、その父親を殴打したように〈プルタルコス『徳は教えらえるるか』2〉、私がおもうには、乙女や青年が失敗するとき、しばしば彼らの親、庇護者、監督者、後見人が——（クリュストモスが言うように）「あなた方はすぐに結婚しないならば、責め苦から無傷に脱出できないだろう」〔『説教』5、「テサロニケの信徒への手紙一」第4章第1節について〕——同じような過失を犯しており、そして、彼女たちのために迅速に準備しないことで、子どもたちと同様に厳しく罰せられなければならない。

さて、自ら結婚する選択の自由をもっている人々に対して、私は、喜劇の老人の良い忠告が実践されることを望みたい。

裕福な者たちが貧乏な家の娘たちを、
持参金なしで結婚して家に迎えれば、
国家はもっと協和することになるだろうし、
我々は今よりも妬みを買うことは少なくなるだろう。

[プラウトゥス 〈『黄金の壺』479-82.〉]

もし彼らが富にあまり拘泥しなければ、我々は国民生活においてはるかに満足し、平安でであったに違いないだろう。美、良き教育は、私がおもうに、それ自体が十分な持参金である。

娘のその美が持参金である。

[オウィディウス 〈『恋愛術』3.257-58.〉]

そして、このような妻を受け入れる者は成功する。アリスタエネトスにおいて、エウブリデスは、貧乏人の「憂鬱な顔つきではなく」、陽気な顔つきで天使のような容貌の子どもと、彼女の境遇を哀れんで、しかもすぐに結婚した〔〈『恋愛書簡集』〉第2巻第12書簡〕。アコンティオスは、ディアナ神に犠牲を捧げるためにデロスにやって来て、気高い少女のキュディッペへの恋に落ちた。そして、彼女の愛を得る手段がなかったので、彼女の膝に黄金の林檎を投げ込んだが、そこには次のように書き記されていた。

私はあなたに、ディアナの聖なる秘儀にかけて本気で誓う、
私があなたのもとに来て、花婿となると。

〈同書、1.10.〉

彼女はそれについて思い巡らし、彼の人物と境遇についていくつか問いただしてから、彼と結婚した。

求婚する者は幸いだ、
それをおこなうに遅延しない者は。

この諺にあるように、当事者たちが互いに充分に見知っているときに、大きな用心や多くの詳細な事柄が必要であろうか。あなたが彼女の状況、彼女の教育を知っており、彼女の人格を愛しているならば、彼女の資力がいかなるものであろうと、もはや躊躇せずに、彼女を娶いなさい。ディドとアエネアスは偶然にも、嵐から逃れて一つの洞窟に入り、彼らは結婚した〔ウエルギリウス『アエネイス』〈4. 160-72.〉〕。メシニッサはシファクス王の妻で、美しい捕虜のソフォニズバと、彼が彼女を最初に見た当日に結婚したが、それは、スキピオとラエリウスが、彼らが彼女のことを別様に扱おうことを決心しないように妨げるためであった〈ティトゥス・リウィウス『ローマ史』30. 12.〉。もしあなたが相手を愛しているならば、同様にしなさい。良き教育と美は立派な持参金であり、金銭に拘泥してはならない。(テオクリトスが言うように)「かつて黄金の民族がいて、愛する者たちは互いに愛を返していた」〔『牧歌』12. 16.〕。もし伝えられることが真実であるならば、黄金の世界では、(高慢なニノスが統治し始める前の、オギュゲスの治世下においても同様に〔ファビウス・ピクトーレ〕)人々はそのようにしていた。そして、今日では、ここに一人、あそこに一人と、数少ない者が同じようにするだろう。私が思うに、これは功を奏しており、あらゆる幸福がそのようにすることによって彼らに訪れる。アテナイの哲学者レオンティオスは、アテナイスと呼ばれる、(わが著者が述べるには) ウェヌスよりもはるかに美しい身体をもち、上品な身のこなしの美しい娘をもっており、「**形姿の隠された予兆によって**」、彼女の運命について秘密裏に予め知っていたので、彼女に持参金として、教育だけを与え、他の子どもたちに持たせたものをほとんど贈与しなかった。しかし、このように教育を受けた彼女は友人たちから愛され、コンスタンティノーブルに、皇帝の妹のプルケリアに仕えるために送られ、彼女から洗礼を受けさせられエウドキアと呼ばれた。皇帝テオドシオスは即座に、彼女の卓越した美しさと申し分のない四肢について知り、すぐのちに、彼の妹の勧めだけによって彼女を自らの妻とした。これは、テオドシオスの高貴な行為であった〔リブシウス『政治的警告と範例』〈15.〉、ゼバスティアン・マイヤー『自然学選集』第1部第13章〕。ロドピスは、その時代に、エジプト全土でもっとも美しい女性だった。彼女は身体を洗いに行き、そして偶然にも(彼女の侍女たちが衣服を見守るのを疎かにしていたわけだが)一羽の鷲が彼女の靴の一方を盗みさり、そして、それをメンフィスにいるエジプト人たちの王プサンメティコスの膝に置いた。彼は靴の素晴らしさと愛らしい足に驚嘆し、さらには鷲の仕業に、それをもたらした仕方に驚嘆した。そして彼は直ちに、その靴を所有している者が彼の宮廷に参上するようという布告を行き渡らせた。かの乙女がやって来て、すぐに王と結婚した〔ゼバスティアン・マイヤー『自然学選集』第1部第14章、アエリアノス〔『動物誌』〕第13巻第33章〕。私は言うが、これは王を英雄的に、君主らしく為した。それゆえに私は彼を賞讃した。また、婚資をもっており、(彼がおこなったように)自分自身もおこなうであろう、あるいは、愛などのゆえに自らの子どもたちを結婚させるだろう者た

ちすべてを賞讃する。もし彼が裕福ならば、彼には自らが望む貧しい女性を、彼女が有徳である限りにおいて、得させることにしよう。というのは、『シラ書（集会の書）』第7章第7節（正しくは第19節）が忠告しているように、「妻である善き女性を蔑ろにしてはならない、彼女の恩恵は黄金に優るのだから」。もし彼女が自分自身の婚資をもっているならば、彼女には夫を選ばせることにしよう。スパルタのダナオスには嫁がせるべき多くの娘がおり、しかも彼女たち全員に十分な婚資をもっていたが、他の者たちが常におこなうように壮麗な縁組を求めることは決してなく、一群の勇敢な若い伊達男たちを自宅に招き入れ、そして彼の娘たちに、各自がもっとも好む者を選び、躊躇なく、その者を自らの夫にするように命じた[パウサニアス〈『ギリシア案内記〉』「ラコニア地方」第3巻〈12.2〉]。彼のこの行為は、当時は大いに賞讃された。しかし、ああ、我々のこの鉄の時代においては、我々は富者だけを尊敬する（というのも、今は、少女が夫を得たいとするならば、莫大な持参金で、彼を買わなければならないからである）。貪欲さと卑しい金銭欲、そしてそのような副次的な要件が、あらゆる善良な婚姻を損なっている。セルビアの君主クラレス（ステファン・ウロシュ2世ミルティン）は（ニケフォロス・グレゴラスが『ローマ史』第6巻で語っているように）、皇帝の妹のエウドキアにひどく執心していた。彼女の兄は大いに望んでいたのだが、彼女はこの君主を甘受することができなかった。というのは、彼は3度妻を娶り、全員を酷く扱ったからである。しかし、それでも皇帝は「偉大なる王の友愛を示して」——というのも、彼は偉大な君主で、かつ厄介な隣人だったからである——彼との婚姻関係を望み、そのために、彼自身の娘のシモニダを彼と婚約させた。彼女は小さな5歳の少女で（彼は40歳だった）、彼は皇帝自身よりも5歳年上だった。このような不釣り合いで、ありそうもない婚姻は、資産と大きな富をもたらすことができる。しかし、それだけではない。金銭だけではなく、またときには、虚栄、慢心、野心が、極端に走った浅ましい貪欲さ自体のような大きな危険をもたらす。もし郷士がただ一人の娘をもっているならば、彼は彼女を、彼女の出自と職業を超えた、実に紳士と結婚させなければならず、そのためには、彼が想像するように、彼女自身の境遇の持参金としては多すぎる、高額の持参金が必要とされる。紳士の娘である相続人は、準男爵の騎士の、少なくとも長男と結婚しなければならない。そして、騎士の唯一の娘は、男爵自身、あるいは公爵と結婚しなければならない。このように上昇していくのだが、彼女の持参金が物を言うのである。そして、こうして富に加えて、さらなる名誉を追求していくことによって、彼らは自らの子どもたちを破滅させ、多くの不幸が続き、しばしば、彼らは自らの家族を崩壊させる。パオロ・ジョーヴィオは〈『著名者列伝』の〉「ガレアッツォ2世」においてその例を示している。英雄的なミラノ公は、「外国との姻戚関係を求め、それは彼に王のごとき輝きを与えたが、彼と子孫たちにとって破壊的で、ほとんど致命的なものだった」。彼は長男のジョヴァンニ・ガレアッツォを、フランス王の妹のイザベルと結婚させた。しかし彼女は、「舅に、20万金貨を支払うという重荷を負わせた」。ミラノにおける彼女の宴会はきわめて費用がかかり、それが彼をほとんど破滅させた。彼の娘のヴィオランタは、イングランド王エドワード3世のもっとも年下の息子である、クラレンス公、〈アントウェルペンの〉リオネルと結婚した。しかし、「彼が到着すると、多大な資力が、驚くべき

気前の良さによって費やされたので、きわめて富裕な王の輝きを超えたと思われるほどだった」。彼は信じがたいほどの鷹揚さによって歓迎され、王の財布はほとんどそれに耐えられないほどだった。というのは、馬、武具、皿、金銭、宝石などの多くの高価な贈り物に加えて、王は公と彼の随員たちのために晩餐会を開催し、そこでは、32皿が供され、同じ量の食べ物が残された。「食卓に残された食べ物は1万人を満足させるものだった」。しかしすぐのちに、「新婦と時候外れの饗宴に意を尽くしながら……」リオネルは死んだ。そして、公には多大の損失となって、儀式は終わった。そうして、称号、名誉、野心は多くの素晴らしくも不幸な婚姻を生みだすが、それは、あらゆる面から、副次的な要件に拠ったからである、(もっとも両者は身体と精神において狂っていて、まったく不承不承で、嫌悪し、しばしば不一致であったのであるが)。かくして愛は消滅し、そして我々は最後に、その苦悩を感じとる。しかし私は、おそらくこの問題に拘泥しすぎた。

別の障害や妨害は、厳格で容赦のない規律、法、厳しい慣習で、それらが彼らに然るべき時に、然るべき場所で結婚することを禁じる。徒弟、従者、学生、贍本保有権をもつ一代の土地所有者、あるいはより劣った隷属土地保有者のように、こうした場合には、彼〔アプレイウス〕が述べるところでは、「欲することは許されるが、得ることは許されない」。彼らは囚人のように鉄格子を通して見るだけで、彼は熱望し、目で捉えるが、タンタロスのように、「唇から」云々〈ホラティウス『諷刺詩集』1.1.68〉。彼らの愛は失われ、このような状況では企ても虚しい。「愛しながら得られないのはとても辛いこと」〔アナクレオン〈『オード集』〉46.〈現行版では29.3-4〉〕。たしかに、彼らが望むならば結婚し、その幾人かは自由に選べるかもしれないことを、私は否定しない。しかし、そうこうしている間に、彼らの場合は絶望的になる。「彼らは狼の耳をつかんでいる」〈テレンティウス『ポルミオ』506〉。彼らは焼き焦げるか、あるいは凍え死ななければならない。これは角の詭弁で、解決するのが困難である。もし彼らが結婚するならば、自らの財産を失い、破滅し、貧乏と困窮によって飢え死ぬ。もし彼らが結婚しなければ、この雄々しい情熱の中で、彼らは猛々しく怒り、苛まれ、彼らを支配する感情によって千々に引き裂かれる。誰もが自制という資質を備えているわけではないがゆえに、ベーズが『離反と離婚についての論考』で述べているように、神にそれを懇願するがよい。というのは、神は彼から結婚の手段を取り去って、彼を独身生活へと呼び出したからである。パウロはミシアからビティニアへ行こうとしていたが、霊がそれを許さなかった〔『使徒言行録』16.7.〕。そしてあなたは、おそらく全力で既婚者になろうとしているが、守護天使はそれが相応しいと見なさない。悪魔もまた、悪い示唆によって多くの善い婚姻を逸らせ、邪魔をするだろう。同様にパウロは、ローマ人たちに会いに行こうとしたのだが、悪魔によって妨げられ、それはできなかった〔『ローマの信徒への手紙』1.13.〕。彼らは宿命によって強いられ、彼らの星辰によって命じられたと、したがって、彼らは自らの辛い運命に不平を漏らし、彼らは結婚したくてたまらないが、あれやこれらの障害がいつもその道を阻むと考える者もいるだろう。私は、占星術師たちがこの点に関して述べていることを知っている。すなわち、プトレマイオスの『テトラビブロス』第4論考第4章〈正しくは第5章〉、シェーナーの〈『出生判断論』〉の第1巻第12章、レオヴィッツの『出生判断の簡潔で明快な説明』

の第1例——その出生図をヘミンガのセクストゥスは、ヒエロニムス・ヴォルフのホロスコープと見なしている——、ペツェル〈『占星術の規則』〉、トスト〈『1595年から1655年まで40年間の、ブランデンブルクの天の運動の新しい暦』〉、そしてレオヴィッツの解説者ガルツェの〈『占星術の方法』〉の第12章、ジャンティーニ、ポンターノ、カンパネッラ、その他の者たち（結婚について、情欲についてのアラビア人の推測や、金星の三分星位などを、また、恋人を得るだろうか、などという質問への彼らの解答は省くとして）。彼らはこのために判断している。すなわち、このように生まれた者は結婚するだろうか、彼が妻を得るのは容易か、あるいは困難か、彼は何人の妻を得るだろうか、彼はいつ結婚するのだろうか、いかなる妻たちが彼には定められているか、結婚は相互の愛によるものなのか。男性と女性の出生図において、第7の家、その主星、支配星、そこにある惑星の検討によって、太陽と月の位置から。特別のアフォーリズムによれば、「もし第7の支配星が第7の家か第2の家にあれば、高貴な妻を選ぶだろう。もし第12の家にあれば、奴隷か卑しい妻を選ぶだろう。もし金星が第12の家にあれば、等々」。多くの同様なことがあるが、それを語るのはあまりに退屈である。しかし、いかなる者も、このような予言によって惑わされ、あるいは自ら嘆かないようにさせなさい。ヒエロニムス・ヴォルフが彼の占星術的対話篇〔レオヴィッツの『出生判断の簡潔で明快な説明』への序文〕において見事に述べているように、「それらは法廷の命令ではない」。それらは推測にすぎない。星辰は誘うが、強いはしない。

天空の星辰は我々の身体を支配する。

というのは、身体は卑しい泥によって造られたからである。

しかし、星辰は理性を享受している魂を強いることはできない。

というのは、理性はただ神ご自身にのみ従うからである。

〈レオヴィッツの『出生判断の簡潔で明快な説明』への序文「占星術の使用についての警告」〉

知恵、精励、分別は、このような命令を完全に覚えてしまうことはないとしても、和らげることができるだろう。「各自にとって、意志が自らの運命を形づくる」。「彼らは注意深く、賢慮をもち、欲求を意のままにする」〔ヒエロニムス・ヴォルフの占星術的対話篇〕〈コルネリウス・ネボス『ポンペニウス・アッティクスの生涯』11. 6.〉。いかなる者も、このような占星術的アフォーリズムによって恐れ、あるいは悩むことのないようにさせなさい、またこのような予言から空しい希望や恐怖へと激しく動かされぬようにさせなさい。そうではなく、あらゆる者を、この状況において、自らの自由意志に従わせ、自らが考えるようにさせなさい。実際、彼らの魂の健康のためには、情欲で焼かれるよりも結婚する方がよい。しかし、彼らの現在の幸運のためには、何か他の手段によって、彼ら自身を落ち着かせ、そして、この激しい奔出の流れを逸らし、彼らの現在の状態を維持し、満足して休息させる方がよい〔すなわち、最善を尽くして、降りかかった運命を引き受けること〕。「処女の花がこうして萎んだことを嘆くこと」が、リバニオス〈の『弁論』27.〉の宦官とともにその悲惨さを嘆くことの方が——というのは、そこには助けも救いもないのだから

ら——、そしてヨセフの娘とともに処女性について悔やむ方が良い（『士師記』 11. 37-38.）。

迷信も同じような性質のもので、僧や修道士や、その他の教会の秩序の中で生きている者たちの誓いも同様だが、とはいえ、はるかに専制的で、いっそう悪い。本性、若さ、そしてこの狂乱の情念が無理やり傾けさせ、一方で激怒させる。しかし、彼らの秩序と誓いは、他方で彼らを阻止する。

その美しさが自らの誓いを阻む。

[オウィディウス 『変身物語』 1. 〈489.〉]

いかなる利得と恩恵を、いかなる利便を、彼らはそれによって積み上げるのか、私は知らない。しかし私が確信しているのは、このような軽率な誓いと非人間的な生き方からは、多くの不都合、多くの病気、多くの悪徳、手淫、異常性欲、持続勃起症 [メルクリアーレ 『医学実践集』 〈3. 38.〉 「持続勃起症について」]、姦通、憂鬱症、狂気、不貞、獣姦、男色、窃盗、殺人、そしてあらゆる種類の害悪が起こるということである。ペイルがここイングランドの修道院を視察したときの、男色者たちの総覧（『ローマ教皇庁の記録』 「序文」）を読みなさい。アンリ・エティエンヌの『ヘロドトスのための弁明』 〈英訳 『驚異の世界』〉 を読みなさい。ウルリヒが彼の書簡の一通で書いていることを読みなさい。すなわち、「グレゴリウス 6 世は、ある女子修道院の近くの養魚地から引き上げられた 600 の幼児の骸骨と骨を見たとき、司祭の結婚についての命令を取り消した。というのは、それがこのような虐殺の原因だったからであり、彼はそのことを大いに悲しみ、悔恨の念から、自らを救ったのである」 [ケムニッツ 『トリエント公会議の法令の検討』 第 3 部 「聖職者の独身について」]。多くの同様な事柄を読みなさい。そして、何が為されるべきかを問いなさい、この誓いは破棄されるべきか否かと。「否」とベッラルミーノは（『キリスト教信仰についての論議』 第 2 巻）「修道士について」 第 38 章で述べている。「独身の誓いから結婚に移るよりも、娼婦を買って身を焦がす方がよい」。そして、コスターは、『〈当代の宗教についての顕著な論争〉 必携』 〈第 17 章〉 「聖職者の独身について」 において、それが絶対的に重大な罪であり、「聖職者にとって、内縁の妻をもつよりも結婚することの方が大きな罪である」と述べている。グレゴリオ・デ・バレンシアは（『当代の信仰についての論争的な事柄』 の）「独身について」 第 6 章において、同じことを、昔日のエッセネ派やモンタヌス派と同様に述べている。その結果、多くの修道者たちが、功德と聖性についてのこの種の誤った確信から、それが自らの生命を救うべきであるにもかかわらず、結婚するよりも容易に死ぬことであろう。1419 年、ピウス 2 世のもと、ポルトガル王の甥で、当時リスボンの大司教に選ばれていたハメス・ロッサが、フィレンツェで重い病気に罹り、「彼の医師たちは彼に対して、この病状はこのようなので、乙女と寝て結婚するか、あるいは死ななければならないと言ったとき、喜んで死ぬことを選んだ」 [アルフォンソ・チョコン 『主イエスからクレメンス 8 世までの教皇たちの生涯と事蹟』]。このことによって彼は称讃された。しかし聖パウロは異なるふうに、「情欲で身を焼くよりも結婚しなさい」 〈『コリン

トの信徒への手紙一』7.9.)と教えている。そして、聖ヒエロニムスは重々しくそれを伝えている。「カエサルの法とキリストの法は異なり、われわれにパピニアヌスが命じることとパウロが命じることは異なる」[ヒエロニムス『書簡集』30.〈実際は73.3.〉]。神の命令と人間の法の間には差異が存在する。それゆえ、キプリアヌスは『書簡集』8.〈正しくは1.8.〉においてきっぱりと非難している。「何事であれ、人間の熱狂によって決定した結果、神の掟を破ることは、不敬虔で、姦通で、神聖さの冒瀆である」。彼らの主要な神学者たちの一人、ゲオルク・ヴィツェルは（『教会の監察』[D. T. ジェイムズによる〈教会の協和の方法〉に付された]「ゲオルク・ヴィツェルの生涯」1623〈正しくは1625〉年版、18ページ）、このような軽率な修道士の誓いのすべてに強く反対し、そして、「のちに自らの空しい性的罪を嘆かないことを」認められているこのような人々が、自分がおこなっていることを真剣に考えるように促している。というのは、彼が続けているように、彼らには独身で内縁の妻をもつことを許すか、あるいは結婚することを許さなければならぬからである。というのは、3千人の司祭たちの中に、「生涯をとおして愛することのない」者を3人見いだすのも難しいだろうからである。したがって、私が結論するには、人間からこのキリスト教的な自由を奪うのは不自然で不敬虔なことであり、その命令はあまりに苛酷で非人間的なものである。

無邪気なミソサザイ、同じくシジュウカラ、
小さなコマドリは自分で選ぶ。
それらは共だつて飛び回る、一緒に行く、
それらが望むままに。
それらは生まれながらの本能をもち、
そして、本性は駆り立て、導くので、
あらゆることを望むがままに定める。

しかし、人間だけが、ああ、辛い情況だ、
まったく残酷にも、この類いの命令によって
抑えられ、規則によって縛られ、
そして、このような愉しみのすべてが禁じられる。
これはいかなるためなのか。本来のあらゆる権利に対して、
大義もなしに、上述の規律とは何なのか、
かくも人間をきつく縛りつけるとは。

[チョーサ〈1561年のストウ版〉における、リドゲイト『礼儀の華』〈57-70.〉]

多くの平信徒はいつも、とりわけ、聖職者たちの結婚に、しかも教会人だけではなく、より卑しい身分や地位の者すべての結婚に不満を抱いている。彼らは、富裕で、妻たちを養うことのでき

る者たち以外は誰も結婚させたくない。というのは、おそらく彼らの教区は孤児たちで一杯になり、世界は乞食たちで満ちるからである。しかし、これらの人々は心が冷たく、人倫に外れた、怪物のような者たち、浅薄な政治家であり〔乞食を産みだすのは人数の多量さではなく無為である〕、世界の大部分が、まだ本来住まわれるべきであるように住まわれていないこと、いかに多くの入植者がアメリカ、未知の南半球の大地、アフリカに送られていることかを考えていない〔あるいは、彼らに仕事に就かせ、彼らに正直な商売を教えなければならない〕。彼らには、ウィリアム・アレクザンダ卿の植民地についての書物〈『植民地の奨励』〉、ウィリアム・ヴォーンの『黄金の羊毛』、リチャード・ウィットボーン卿〈の『ニューファンドランド島の発見と論説』〉、ハグソープ氏〈の『イングランドの国庫、すなわち海と航海についての論説』〉を読ませなさい。そうすれば、彼らはきっと別の意見をもつことになるだろう。かのローマの政治家たちは別の考えをもっていた。彼らは、自らの都市と国家の人数が多すぎることに決してなりえないと考えた。ハドリアヌス帝は、「金銭よりも、人々の増加によって帝国が豊かになることを選ぶ」と語った。アウグストゥス帝はローマにおいて、独身者たちに、結婚するように説得する演説をおこなった〔ディオオン・カシウス〈『ローマ史』〉56. (49.)〕。ある国々は昔から、彼らに結婚するように強制しており、たとえば、ユダヤ人、トルコ人、インド人、中国人は、とりわけ昨今では、きわめて多くの無為の者たちが修道院で生きることを許すわれわれの規律にとても驚いており、また、いかにして彼らが貞淑に生きることができるのかについて、しばしば不思議に思っている〔サルディ〈『異教徒たちの慣習と祭儀について』〉、ブクストルフ〈『ユダヤのシナゴーク』〉、リッチ〈『中国においてイエズス会によって企てられたキリスト教の布教』〉〕。マラニャン島において、当地の統治者と取るに足らぬ王は、フランス人に対して驚嘆した。そして、きわめて多くの修道士たちと、その他の彼らの仲間たちが、妻を娶らずに生きていることができたことに驚いた。彼はそれが不可能であると考え、それを信じようとはしなかった〔クレマン・フロン『マラニャン島と周囲の土地におけるカプチン会士の布教歴史』「1614年」〕。もしこれらの人々がわれわれの多くの宗教的施設について概観し、ヨーロッパ中に広がるわれわれの修道院の多くを、パドヴァには18の女子修道院、ヴェネツィアには31の修道院と28の女子修道院、と調査し——「爪からライオンと判る」〈エラスムス『格言集』1. 9. 34.〉——この割合が他のすべての地域と都市にあてはまるならば、これらの者たちは貞淑に生きているのか、と彼らは考えるのではないだろうか。これらの者たちには自らが望むとおり、そのふりをさせておこう。私は、テルトゥリアヌスの意見に与する。すなわち、強制によってでなければ、自制できる者はほとんどいない。（彼はこう述べている、）「おお、貞潔よ、あなたはこの世界で、容易に得られることはなく、めったに居続けることのない稀な女神だ。だが、あなたも時折、自然の欠陥のゆえに、あるいは規律が説得し、命令が強いるならば、駆りたてられることもある」〈テルトゥリアヌス『貞潔について』1. 1.〕。あるいは、ある副次的な事柄、不機嫌や不満のゆえに、彼らは最初の愛を失ったのであり、自らが望む者たちを得ることなく、手段も性急な誓いなども欠くであろう。しかし、彼は進んで自制できるであろうか。私はそうとは思わない。したがって、深慮において、人間の愚かさへの憐情

から、あるいは、いっそう悪い不都合を避けるために——というのは、それは飲食と同様に必要なもの一つとして考えられており、また若者の活力、ほとんどの男性の身体の状態と気性はきわめて激しくそれを欲するのであるから——今まで、ある国々においては、一夫多妻と売春宿が認められてきたのであり、ラジヴィウ [『エルサレムへの巡礼〈第3書簡〉] が述べているように、エジプトの大都市カイロにおいては、少年を除いて、10万人の後宮が許容されていた。きわめて多くの者たちが、フェズ、ローマ、ナポリ、フィレンツェ、ヴェネツィアなど、そして、いまでもヨーロッパの他の地域や都市で、同様に扱われている。というのは、若者たちの内でもとりわけ、教会人と従者が貞淑に生きることはほとんどできないからである。スペイン人ビビウスは、おそらくこのことを考慮して、彼の友人で、富裕なローマ人の伊達者クラッスを洞窟に匿ったとき、「その年齢が掻きたてる欲望を満たすために」[プルタルコス『クラッスの生涯』〈5〉]、彼が閉じ込められている間じゅう、彼に伴わせようと、二人の好色な少女を送った。そして、パルティアの將軍スレナスは、ローマ人たちとの戦闘のさいに、200人の愛妾を同行させたが〈同上21〉、スイス人は今も、普通、自らの妻を連れていく。しかし、このやり方が一般的に是認されているわけではなく、むしろ違法で嫌悪すべきものとして否定されているがゆえに、ほとんどの国々において、人々は結婚するように勧められており、多くの子どもをもつ者には大きな報酬が約束され、そして結婚を望まない者には罰金が課せられる、三児の法。そして、アウルス・ゲッリウス [『アッティカの夜』] の第2巻第15章、アイリアノス [『ギリシア奇譚集』] の第6巻第5章、ウァレリアウス [『記憶されるべき事蹟』] の第1巻〈実際は2巻〉第9章においても同様のことが読める。我々は〈アイリアノス『ギリシア奇譚集』6.6.において〉、3人の子どもが辛い仕事から解放し、5人の子どもがあらゆる責務から、父親を解放することを読む。「女性は子どもを産むことによって救われます」 [『テモテへの第一の手紙』2.15.]。エピクテトスは全員を結婚させたいのだろう [『語録』1.11, 3.7.]。そして、プラトン『法律』6.〈774A〉によれば、35歳までに結婚しない者は結婚を強制され、また罰せられ、金銭をユノの神殿に捧げるか、あるいは公的な使用に供さなければならない。妻を娶らずに死ぬ者は、ある国々では不幸な者に数えられ、ポエティウスが言及するには、彼はもっとも不幸な者である。そして、もし彼がまったく幸福であるとしても、それは「不幸な幸運」なのである [『哲学の慰め』3. 散文7.]。彼らは普通、彼らの状態を嘆き、それゆえに悲嘆にくれるにちがいない、「おお。わが愛しの息子よ、云々」と。ルキアノス『悲しみについて』〈13〉、サンディ訳、83葉などを見よ。

しかし、それにもかかわらず、我々の中の多くの者は反対の立場をとっている。彼ら自身は結婚しているが、他の者たちを燃え上がらせ、火も炎も気にかけない、彼らに煩わされることがないようにする。ある者は気難しく、ある者は貪欲であり、両者がともに能力や私財があるがゆえに、婚することができるだろう。しかしそれも、あまりに選り好み過ぎるので、皇帝テオフィロスが彼の母のエウフロシユネから、彼の宮殿の大広間で、帝国のもっとも稀少な美女たちを一挙に眼前に示され、自分がもっとも好む女性に黄金の林檎を与えるように命じられたような場合でもなければならないだろう。もし彼らが、彼らの国が提供するすべての美しい乙女たちから好

きな女性を選ぶことができるならば、彼らは自ら進んで結婚へと身を落とすだろう。さもなければ……別のエピクロス派の徒が声を大にして言うように〔ニコラス・ヒル『エピクロス、デモクリトス、テオフラストス……の哲学』〕、なぜ人は結婚しなければならないのだろうか。金銭的な事柄以外に、結婚とは何だろうか。なぜ自由な本性が、これやあれやの男や女へと、身体と財産の枷で、囲い込まれ、制限され、強制されなければならないのだろうか。しかしまた、女性を、全人生を通じて、心から愛し、讃え、後を追ひ、「ペネロペの求婚者たちのように」〈ホラティウス『書簡集』1. 2. 28.〉、彼女に随伴してない限りは決して満足を感じず、彼女の美を熱心に見つめ、彼女を仔細に眺め、彼女に追いつがり、常に彼女に手出ししながら、しかし、あえて結婚しようとせず、実際にしないよう者たちも存在する。多くの貧しい、そしてより卑しい者たちは、神の摂理をあまりに疑っており、「このような世俗の事柄は望まず、あえて試みないが」、それは、困窮、悲哀、悲惨を恐れて、あるいは、レメンス〔『自然の隠された驚異』第4巻13.〕が述べているように〈正しくはレメンスからの引用ではない〉、「口やかましく、だらしがなく、不品行な妻」と出会うことを恐れているからである。それゆえ、「彼らはウェヌスに見棄てられ、哀しい青年期を過ごす」〔セネカ『ヒッポリュトス（パエドラ）』〈463.〉〕。彼らは独身を通すことを決心する、エパミノンデスがおこなったように〈プルタルコス「ペロピダス」3.〉。

彼は言う、独身生活よりも優れた、立派なものはない。

[ホラティウス〈『書簡集』1. 1. 88.〕]

そして彼はヒッポリュトスとともにあらゆる女性を諦めようとする。「私はあらゆる女性を避け、恐れ、忌避し、忌み嫌う、等々」〔セネカ『ヒッポリュトス（パエドラ）』〈566.〉〕。しかし、

ヒッポリュトスよ、お前は自分が人生の良きものから逸れていることを知らない。

ヒッポリュトスよ、お前は知らない——

ああ、哀れなヒッポリュトスよ、お前は自分が言っていることを知らない。実際はそれとは別なのである、ヒッポリュトスよ。ある者たちは、「学者が妻を娶るべきどうか」、疑念を抱いている〔エネア・シルヴィオ・ピッコローミニ『シギスムンドの金言について』、ヘインス〈『書簡体論攷』〉「プリメリウスへ」〕。もし妻が美しければ、彼女は彼を文法書からアルファベットの学習本へと引き戻すだろう。あるいは、接吻と戯れによって、彼女は彼の研究を妨げるだろう。もし彼女が醜女ならば、小言によって妨げるだろう。彼はどちらにも心に向けることはできない。ボローニャの偉大な学者であったフィリッポ・ベロアルドがかつて書いたように、「なぜなら、学問研究が妨げられるから、等々」〈ベロアルド版アプレイウス『変身物語』1. 742.〉。しかし、彼は最後に前言を撤回し、真実を込めた言葉による厳粛なやり方で、世界とすべての女性に許しを請うた。そしてあなた方は、彼のアプレイウス〈『変身物語』〉第6巻への註解において、彼自身が述べてい

る話を耳にするだろう。すなわち、長い間、私は独身生活を送ってきた。「そして、妻を娶ることを常に忌み嫌い、独身生活よりも喜ばしいことはないと思ってきた」〈同書〉。私は結婚に我慢ができなかった。しかし彷徨う者として、（彼の自身の言葉を用いれば）「移り気の、気ままな愛する者として、数多くの愛の間を飛び回った」〈同書〉。私はそれが可能な時には味見し、それ以上のこともやり、結婚をひどく罵り、そして公然と聴衆を前にして、ユウェナリウスの第6諷刺詩を解釈し、プルタルコスとセネカから、女性を攻撃しうるすべての警句を積み上げた。しかし今は、私はステシコロスとともに、「改詠詩を歌う。既婚者たちの間に数え上げられることを後悔しない」〈同書〉。私は結婚について肯定する。私は既婚者であることを喜んでいる〔私には、私の心の意図に従って、法律家の娘のカミッラ・ペロッティという妻がいる〕。私は、私に妻がいること、とても優しい妻が、とても若く、貞潔な妻が、とても愛らしい妻がいることを心から喜んでいる。そして、私は他のすべての男性が結婚するように望み、また欲する。そして、とりわけ学者たちにはそうであり、昔日のことが、マリアはホルテンシウスに、テレンティアはトゥッリウスに、カルフルニアはプリニウスに、プデンティッラはアプレイウスに対して、自分たちの夫が黙考し執筆するときには、蠟燭を掲げていたが、そのように学者たちの妻たちは夫たちにおこなうであろうし、わが愛するカミッラも私にそうおこなう。他の男たちには、女たちを毛嫌いし、罵り、嘲るようにさせ、前述のこととは正反対のことを何でも言わせよう。「結婚をしない男は、諸々の悪を逃れている、等々」〈同上 1. 741.〉。独身者は幸福な者である、等々。しかしこれは見戯である。

少年よ、お前は甘き愛を蔑ろにするな、ダンスを蔑ろにするな。

[ホラティウス 〈『オード集』 1. 9. 15-16.〕]

これらの男たちにはあまりに信用が置けず、大いに非難すべきなのだから、次の言葉と言っても無意味だ。

あなた方は、少数の者たちの罪過をすべての者に広げること控えなさい。

[オウィディウス 〈『恋愛術』 3. 9.〕]

彼らは、少数の者たちのゆえに全員を非難すべきではない。多くの悪妻がいるように良妻もいて、不品行な妻がいるように有徳な妻もいる。ソロモンが『箴言』31.と『集会の書』第26章と36章での彼女らを賞讃して述べたことを読みなさい。「徳の高い妻をもつ男は幸せだ、彼の月日は二倍になるのだから。徳の高い妻は夫を喜ばせ、彼の人生の歳月を平安さで満たすだろう。善き妻は尊い財産であり、助力であり（36. 24.）、休息の支柱である」。

妻を得るものは、兄弟と姉妹を得る。

そして 25. では「妻をもたない男は、嘆きながらあちらこちらと彷徨う」。「暗い心配は妻によって減じられる」。女たちは男の生涯にとって唯一無二の喜びであり、慰めであり、「男たちの助力と快樂のために」生まれた、「家族の基礎である」[アフラニウス〈『プリウイグヌス』〕]。

人類の悦楽、生の慰安、
夜の魅惑、昼のきわめて穏やかな安寧、
男たちの欲望、若者たちの希望、等々。

[リーチ〈『優れたムーサ』 2. 76.〕]

「妻は青年の女主人、中年の伴侶、老年の看護婦」[バイコン『随筆集』〈8.〕]。「喜びと悲しみを分かち者」、支柱、助力、等々。

男の最高の所有物は愛すべき妻であり、
怒りを和らげ、男の心を悲しみから遠ざける。

[エウリピデス〈『メデア』 13-15、ストバエオス『説教集』 65.〕]

この世には、善き妻に匹敵するような、喜悅も慰安も甘美も快樂も存在しない。

愛らしい妻と誠実な夫が家で、心を合わせて暮らす
時のような——

〈ホメロス『オデュッセイア』 6. 183-84.〕

このように、我々のホメロスは語り、妻は常に、病気でも健康でも同じで、いつのときでも夫の眼、彼の手、彼の親しい友人、彼の伴侶であり、彼の分身であり、いかなる厄災によって切り離されることなく、あらゆる悲哀と不満を進んで分かち合い、そして、インドの女性がするように、夫とともに生きて死に、それどころか彼のために直ちに死のうとする。テッサリアの王アドメトスは、自らが死の床についていたとき、アポロンから、もし彼が自分の代わりに死すべき誰かを得ることができるならば、さらに生きることができると語る神託を受けた。しかし、あらゆる者が、「老いぼれていたのだが」彼の両親も、友人たちも随員たちも彼を見棄てたとき、彼の妻のアルケステスは若かったにもかかわらず、心から進んでその役目を引き受けたのだが、これよりも欲せられ、あるいは期待されることがあるだろうか〈この物語はエウリピデスとヒュギヌス『神話伝説集』 51, 251. で語られており、アルケステスはヘラクレスによって蘇生される〉。その一方において、いかなる妻をも消沈させることのできる、数限りない悪い夫が存在しているのだが（私は彼らのある者たちについてはひどく罵らなければならない）、しかしまた、少数の善い夫も存

在しており、彼らは結婚の慣習を真面目に厳守している。（フレゴーズが語っているように〈『記憶される事績について』4.6.〉）、ナポリ王国の誠実な田舎の男は、海岸近くの畑で、自分の妻がモータニアの海賊によって連れ去られるのを見るやいなや、大急ぎで海の中を追いかけ、まず顎までつかり、もはや歩くことができなくなると、泳いで、船長に自分の妻を解放するようにと、もし彼女を解放してはならないのなら、自分は船長に囚人として従うからと懇願した。というのも、彼は、ただ最愛の妻を喜ばせるために、ガレー船の漕ぎ手として、船長の奴隷となり、あらゆる悲惨さに自ら耐えることを決心していたからである。ムーア人たちはその男の意志の堅固さを見てとり、チュニスにいる彼らの監督官に事情をすべて説明し、二人の双方を自由にするとともに、彼らに一生を暮らしていけるほどの立派な年金を下賜した。私は、この目的のために多くの話をするができるだろう。しかし、しばしば反対のことが証明される例を仮定してみなさい。というのは、結婚は厄介なもので、したがって、それを避けるべきであることに議論の余地はないからである。「災難を避けようとする者はこの世を避けなければならない」（エウセビオス『福音の準備』5第50章）。ある災難が結婚の中にあることを私は否定しない。エラスムスが述べるように、「結婚は困難なものであるが、多くの点で和らげられる、等々」。それを軽減する多くのものが存在する〔ミンネルムス〈断片1.1.〉〕。愛らしい妻、可愛い子どもたち、人間の子どもの楽しみ。『シラ書（集会の書）』2.8等々。そして、あらゆる困難がそこにあるとも、「公的な有益さのゆえに、進んで果たすべき困難なことを引き受けなければならない」〔エラスムス〕。

民たちよ、このことを聞け、とスサリオンは言う。

女たちは悪である。それにもかかわらず、民たちよ、

この悪がなくては、祖国に住むことはできないのだ。

〔ストバイオス〈『説教』67.〉〕

女は悪であるが、必要な悪である。

〔メナンドロス〈カッセル＝オースティン編断片801、フェレモン、同編断片165.〉〕

女たちは必要な悪であり、我々自身の目的のために彼女たちを利用して、子孫をもうけ——「ウェヌスは人類を創り、維持する」〔セネカ『ヒッポリュトス（パエドラ）』〈469-70.〉〕——、教会を宣伝しなければならない。というのは、いかなる目的のために男は生まれるのだろうか、なぜ男は生きるのだろうか、この世界の人々を増やすためでなければ。そして、いかにして男はそれを巧みにできるだろうか、もし結婚しないならば。「結婚は人類に不滅性をもたらす」とネヴィッツァーノ〔〈『婚姻の詩歌集』〉第3巻第1番〕は述べている。そして、タキトゥス〔『歴史』第4巻〈52.〉〕に従えば、結婚は「帝国のもっとも堅固な城壁」である。

彼は恥ずかしく生き、彼によって他の者は生きない。

[パンティーオ・デッラ・ステッラータ (『生の獣帯』 4. 279.)]

ペロピダスはエパメイノンダスに対しこのことに反駁した [ブルゾーニ (『滑稽話集』) 第7巻第23章]。彼は国家に相応しくない一員であり、国家を守るために、自らの後に子どもを残さなかったのである。そして、トリスメギストスが彼の息子のテウトに述べたように、「独身の男と付き合い合ってはならない」(『アスクレピウス』第9巻)。彼は、おそらく独身者は自らが為すべきように誠実に生きることができないと考えた。同様に、偉大な神学者で聖なる人物、ゲオルク・ヴィツェルは、最近、26の議論(『王道』所収)によって、結婚を、あらゆる種類の人間にとってもっとも必要で、喜んで応ずべきもっとも賞讃に値し、もっとも適切なこととして称揚している。そして、「妻がいなくては、誰も敬虔に生きることができず、幸福に死ぬことができないと確信している」。彼は誤っており、国家の敵で、自分自身に対して有害で、世間に対して破壊的で、自然への背教者で、天と地への謀反者である。我々の強情で、頑固で、執拗な独身者たちに、このことを考えさせよう。すなわち、「もし我々が妻がいなくても生きることができれば、すべて彼らの欲するままにさせよう、メテッルス・ヌミディクスがアウルス・ゲッルス [『アッティカの夜』第1巻第6章] で述べているように。しかし、我々はそれができないのだから、彼らをすべて結婚させ、彼ら自身の個人的な快樂や事情よりも、むしろ公的な善を彼らに考えさせよう」。賢明なエウリピデス (『ヒッポリュトス』616-24) が主張しているように、もし我々が子どもたちを金銀で買うことができ、「女性と交わることなく」、子どもが供給されるのであれば、それは幸福なことだろうが、それはできない相談である。

大地は無残にも放置されて荒廃するだろう。

海にはいかなる魚群もなく空しいままだろう。

空には鳥がいなくなり、森の野獣もそうだろう。

[セネカ『ヒッポリュトス (パエドラ)』471-73.]

したがって、必然が我々に結婚を強いるのである。

しかし、私は、結婚するように説得したり推奨するための論拠を見いだすために、何に悩むというのだろうか。私が述べたすべての事柄の短い要約に、そしてさらには、ヤコブス・デ・ウォラギネによって、結婚の悲惨さを和らげるために [『創世記』2. (18.)]、簡潔に、核心をついて、感傷的に、明快に、そして優雅に、12の動機において述べられたことに注目しなさい。

- 1 あなたは財産をもっているか。あなたはそれを保ち、増やすべきものをもつことになる。
- 2 あなたは何ももっていないのか。あなたにはそれを得るために助けるべきものをもつことになる。
- 3 あなたは幸運であるのか。あなたの幸福は二倍になる。

- 4 あなたは不運であるのか。彼女が慰め、助け、あなたの重荷の一部を担って、より耐えられるものにする。
- 5 あなたは家にいるのか。彼女は憂鬱を取り去るだろう。
- 6 あなたは外出しているのか。彼女は家の中からあなたの歩みを気づかい、あなたの不在時にあなたのことを思い、あなたの帰宅を喜んで迎える。
- 7 共同体がなくては喜びが存在しないが、結婚ほど甘美な共同体はない。
- 8 夫婦の愛の絆は堅固である。
- 9 親類の素晴らしい仲間は増大し、両親の数は二倍になり、兄弟、姉妹、従弟もそうである。
- 10 あなたは適正で幸福な子によって父になる。

11 モーセは結婚の不毛さを呪ったが、独身ははるかに不毛ではないだろうか。
12 もし自然が罰を逃れないならば、あなたの意志は罰を避けることはできないだろう。
以上のことはすべて真実である、とあなたは言う。そして、そうではないとは誰も知らない。しかし、これらの動機に応酬し、それとはまったく反対の対抗パロディをつくるのはきわめて容易なことなのか。私自身を訓練するために、私がそれを試みよう。

- 1 あなたは財産をもっているか。あなたはそれを消費すべき財産を持っている。
- 2 あなたは何ももっていないのか。あなたの貧困は増大する。
- 3 あなたは幸運であるのか。あなたの幸福は終わる。
- 4 あなたは不運であるのか。ヨブの妻のように、彼女はあなたの悲惨を悪化させ、あなたの魂を苦しめ、あなたの重荷を耐えられないものにする。
- 5 あなたは家にいるのか。彼女はドアの外からがみがみ言うだろう。
- 6 あなたは外出しているのか。もしあなたが賢明ならそのまま外にいなさい。彼女はおそらくあなたの不在時に角を接ぎ木し、あなたが帰宅すると顔をしかめるだろう。
- 7 孤独よりも満足を与えるものは存在せず、独身がもつような孤独は存在しない。
- 8 結婚の絆は堅固であり、それを緩める望みはなく、あなたは破滅する。
- 9 あなたの親族の数は増え、あなたは妻の友人たちによって貪られるだろう。
- 10 あなたは不貞な妻によって「寝取られ夫」となり、そして自分自身の子どもの代わりに他人の子どもを育てるだろう。
- 11 パウロは結婚を勧めているが、しかしより独身を好んでいる。
- 12 結婚は誉められるものだろうか。不滅の花冠は処女性に属しているのではないのか。

こうして、シラキデス自身が、女性に味方して、また女性に抗して、言葉の限りを尽くして語っており、同様に、ほとんどすべての哲学者が、「賛成」と「反対」に論陣を張っており、同様に、あらゆる詩人がこの問題について議論しており（だが、彼らが述べていることに民衆はいかなる考慮を払うだろうか）、同様に、おそらく私も考え出すことができるし、そしてあなたも同様にできる。すべてが語られたとき、あるものは善く、あるものは悪いのだから、危険を冒してみようではないか。したがって、私はセネカとともにこう結論する。

——なぜあなたは一人で寝台に横たわっているのか。
哀しみの青春を解き放ちなさい。今や快樂を掴みとりなさい。
手綱を緩めなさい。人生の最良の日々があなたから
去らぬようにしなさい。

〈『ヒュポリュトス（パエドラ）』448-51〉

なぜあなたは一人で横たわっているのか、あなたの青春と最良の日々を立ち去るままにするのか。
あなたは可能なきに結婚しなさい——「あなたの青春の日に、陰鬱な老年は遠くある」〈ホラティウス『オード集』1.9.17-18〉——あなたは能力があり、屈強なのだから。

あなたは、「あなただけが好きだ」と言う者を選びなさい。

[オウィディウス〈『恋愛術』1.42.〉]

あなたは選択しなさい、直ちに進みなさい、遅れないようにしなさい。しかし、あなたに降りかかる運命は甘受しなさい。以下は真実のことである。

——悪い妻に当たった者は不幸で、
善い妻に当たった者は幸福である。
[エウリピデス〈ストバエオス『説教』67.〉]

私が告白するが、独身で過ごすのも結婚するのも危険である。

確かに、妻を娶るのも娶らないのも悪である。
[ギリシア語から。ウァレリウス・マキシムス〈『記憶されるべき事績』第7巻第7章]

それは悪いことかもしれないし、善いことかもしれない。一方では、それは十字架であり厄災であるが、他方では、それは甘美な喜悅、比類のない幸福、至福の状態、まったく言葉に表せない利得、唯一無二の満足である。すべて証拠のあることである。それゆえ、強情すぎずに、貪欲すぎずに、不信を抱きすぎずに、詮索好きで気難しすぎずにいなさい。そして、我々はすべて結婚し、「互いの抱擁で暖める」ことにしよう。「私をあなたのもとにもたらし、あなたを私のもとにもたらししてください」。明日は聖バレンタインの日なのだから〈シェイクスピア『ハムレット』4.5.46.におけるオフィーリアの歌〉。その日をクビドのための、あの偉大な愛の神のための、ヒュメナイオスのための祝日にしよう。そして、我々の先祖とともに、みんな一緒に、ウエヌスの宵宮〔古の詩人による『ウエヌスの宵宮』〕を祝おう。

愛したことの無い者は明日愛せよ、愛したことのある者も明日愛せよ。

春は新鮮で、春は旋律に満ち、春に世界が生まれる。

愛する者たちは春に交わり、鳥たちは春に番い、

そして森は髪を解き、……

明日愛せよ、……

〈『ウェヌスの宵宮』1-5〉

結婚を嫌悪する者にはさらに、バルバロの『結婚について』第1巻第1章、レメンスの『自然の隠された驚異』第4章、ゴドフロワの『愛についての対話篇』第3巻〈正しくは第2巻〉第1章、ネヴィッツァーノ『婚姻の詩歌集』第3巻〈第18番〉、アレッサンドロ・ダレッサンドロの〈『愉快な日々』〉第4巻第8章、タンストールの〈『結婚の賞讃の演説』〉、エラスムスの「結婚を賞讃する」論考、などを読ませよ。そして、私は疑わないが、最後に彼は得心して、ペロアルドとともに前言を取り消し、彼の以前の狂気を懺悔し、悔い改めの歌を歌い、この愛という偉大の神の神性と合致することを欲し、その神殿に巡礼し、彼の像に対して奉献し、彼の祭壇に捧げ物をするだろう。そして、ついには、他の者たちと同様に、自ら進んで結婚に応じるだろう。私は、「ストア派の厳格な一族の中に、彼の厳粛な顎髭——それゆえに横柄な顔つきになっているのだが——を妻の裁断に委ねることを拒否するような者」[ヘインス〈『書簡体論攷』〉「ヤコブス・プリメリウスへ」]は、あるいは、この点において仲間たちと争うような者は見いだされないことを願う。というのは、(ウェアロが考えているように)「正しい男性は、美しい妻、甘い妻、愛らしい妻よりも、何を喜んで見ようとするのだろうか」〈『セスクリクセス』ビュヒェラー編断片482〉。世界は、これより良い光景、これより甘美な内実、これより美しい対象、これより優美な外観を与えることができるだろうか。

それゆえ、この結婚というものは最後で最良の避難所であり、英雄的愛の救済策であるので、あらゆる疑いは一掃され、障害は除去される。私は再び言うが、彼ら二人の欲望に従うならば、残っているものは、彼らが幸福のうちに結ばれることである。というのは、他の仕方ではその残りの一つを満たすことはできないからである。神はわれわれすべてに善き妻を送り、あらゆる男性にこの種の望みを、そして私には私の望みを送った。

そして、この世界すべてを造り給うた神が、

彼に、かくも犠牲を払って贖った彼の愛を送り給うことを。

[チョーサー〈『カンタベリー物語』「騎士の物語」3099 - 100〉]

もしあらゆる関係者が喜ぶならば、婚姻を公示せよ、結婚成立と。「花嫁のロダンテは花婿のドシクレを享受するだろう」[テオドロス・プルドロモス『愛の歌』第9巻]。クレイトボンとレウキッ

ペ〈アキレウス・タティオス『クレイトボンとレウキッペの恋の話』〉、テオギネスとカリクレア〈ヘリオドロス『エティオピア物語』〉も同様に。ポリアルクスは彼のアルゲニス、リサンダーはカリスタを連れてくる〈パークリ『アルゲニス』〉。(仮面舞踏会を仕上げるために)「少年のイピスはイアンテを手に入れた」[オウィディウス〈『変身物語』9.797.〕。

そして、トロイラスは快樂と休息の中にあつた、
彼の愛する心、クリセイデとともに。

[チョーサ『トロイラスとクリセイデ』〈第3巻〉の結語。]

そして、彼らは難儀して障壁に打ち勝って、多くの困難と遅滞にもかかわらず結婚をやつたのことで実現したのだけれども、彼らには、(そのような結婚をしている)アリストエネトスの次の言葉を慰めのために読んでいただこう。「多くの労苦と心配ののちには、愛する者たちの結婚はより甘美で愉しいものとなる」[『恋愛書簡集』第4書簡第2巻]。われわれは一般的に、喜劇を結婚と握手によって閉じるように、ここでわれわれの論議を閉じて、すべてを祝婚歌[ヨハネス・セクンドゥス『詩歌集』〈8(アナクレオンより) .54-55.〕で締めくくりたい。

「幸福なり、結婚は」。神は彼ら二人に喜悦を与える。「ヒュメンよ、おおヒュメナエよ。ヒュメンよ、来て下さい、おお、ヒュメナエよ。善きことがなされた」[カトゥルス〈『エピグラム集』〉62.]。「私が思うに、神々の考えが、意向がなくては無理だろう」〈ウエルギリウス『アエネイス』5.56.〕。それは幸福な星の巡り合わせ、幸運な結婚、幸運なカップル。

両者は精神においても身体においても卓越し、両者は
花の時分にあり、――

〈アウソニウス『百の祝婚歌』61, 1.2-3.〕

彼らは身体と精神の能力において卓越しており、両者は年齢、若さ、活力、敏捷さにおいて等しく、彼女はライスやヘレナのように美しく愛らしく、彼はもう一人のカリヌスでありアルキピアデスである。

――思うがままに楽しみなさい。そしてすぐに
子どもたちをもうけなさい。――

[カトゥルス〈『エピグラム集』61.207-8.〕]

「乳香のような甘い香りを放ち、百合のような花々をつけなさい」[『シラ書(集会の書)』39.14.]。こうして、我々は次のようにも言えるだろう。

賢いカストルにかけて、パンフィルスには、子どもが生まれた。

〈テレンティウス『アンドロス島の女』486.〉

その一方で、私は言う。

若者たちよ、行って、行動しなさい、鳩があなたたちの眩きを、
鳶が腕を、貝が接吻を凌駕しないように。

[ガッリエヌス『祝婚歌』]

そして、朝早くに、スパルタの少女たちがヘレネとメネラオスに、彼らの窓辺で歌い、上首尾を願って挨拶したように、我々もあなた方の窓辺で歌う。

ごきげんよう、花嫁よ。ごきげんよう、幸福な花婿よ。ラトナがあなた方に
幸多い子を与えられますように、ウェヌスがあなた方に互いに等しい愛を
与えられますように、サトゥルヌスが永続する富を与えられますように。
お眠りなさい、互いの胸に抱かれて、愛を、そして望みを
吸い込みながら――

[テオクリトス『牧歌』18. 〈50ff.〉]

さらに一生の間ずっと

あなた方に雉鳩の和合が続きますように、
そして、鴉の長命が――

[エラスムス「ペトルス・エギディウスのための祝婚歌」]

(彼が述べているように) ムーサたちに歌わせ、三美神に踊らせよ、彼らの婚礼だけではなくすべての日々ずっと。「彼らの心を結びつけ、いかなる苛立ちも怒りも彼らに生じないようにせよ。彼にはけっして、彼女をわが喜び、わが光以外の名で呼ばないように、また彼女にはけっして、彼を愛しい人以外の名で呼ばないようにさせよ。彼らのこの幸福には、老年がわずかでもそれを減じないようにさせよ。むしろ、彼らが年齢を重ねるにつれて、彼らの相互の愛と慰安が増えるようにせよ」。そして、彼らが現世から離れるときには

――彼らはかくも長い歳月を、心をつにして生きてきたのだから、
同時に二人の命を終えさせよ、彼がけっして、妻の
墓を見ないように、また妻によって埋葬されないように。

[オウィディウス『変身物語』8.〈708-10.〉]

幸福な二人よ、私の歌にいくばくかの力があるならば、
いかなる歳月が過ぎても、あなた方の記憶は永遠に消えることはないだろう。

〈ウェルギリウス『アエネイス』8.9.446-47.〉

そして、愛については——彼[コロンマン『愛の輪郭』]が述べているように——「より良く判断しうる者の訂正を受けたうえで」以上に語ったことで十分だろう。さらに愛の治療法についてお望みの方は、ヤーソン・デ・ヴェルデ、〈ヴィッラ・ノーヴァの〉アルナルドゥス、〈ジャン・バティスト・〉ダ・モンテ、サヴォナローラ、ヨハン・ランゲ、バラスオン〈・ド・タラント〉、〈アントニオ・〉チェルミゾーネ、アレッサンドロ・ベネデッティ、デュ・ローラン、〈フランソワ・〉ヴェルリオラ、詩人たちでは〈オウィディウス・〉ナソ、同時代人ではチョーサを読みたい。そして私は、彼とともにこう結論する。

ここでも、あらゆる箇所でも、私の言葉については、
私はそれらをすべて、愛の技法を理解されている
あなた方の訂正に委ねて語っておりますし、
そして、私の語りを増やすにせよ、削るにせよ
すべてをあなた方の判断にお任せしますので、宜しく願います。
しかし、さて、私の先ほどの話の本筋に戻りましょう。

[チョーサ『トロイラスとクリセイデ』第3巻の終わり〈1331-37.〉]

『憂鬱の解剖』 序歌

デモクリトス・ジュニアから自著へ

旅立て、書よ、お前を、幸いなる、とは言うまい、
慈愛ある陽が幸いなるものにせぬ間は。
どこでも好きなどころを旅せよ、世界中を、
そして、お前の主人の才能を模倣して示せ。
魅惑的なカリタスたちの間を行き、お前の読者になりそうな、
ムーサたちの信奉者悉くに挨拶せよ。
田舎に住もうと町に住もうと、王の館に参上しようと、
心静かに遡っておれ、齒をむきだしたりせず。

もし、誰か貴人か勇者がお前を詳しく見ようとしたなら、
従順に自分を差し出してやれ、好きなだけ読み通せるよう。 10
貴人が望むもの、勇者が望むものあるも、
この頁が、より好ましく楽しませうるかもしれない。
もし、誰か気難しいカトーか、陰鬱な元老員が、
なおこの本を見たいというなら、
あるいは執政官が望むなら、恭しく振る舞いなさい、 15
しかし、そんな人はいない、鷲は蠅など捕えはしないのだ。
彼らには卑小なものに関わる時間などない、時間は飛び去るのだから、
彼らに、私と同じような読者になることを望みはしない。
もし、厳格な貴婦人がたまたまこちらにやって来たり、
妃殿下がお前を読むようなことがあれば、 20
おそらく彼女たちのお気に召さないことも、お気に召すこともあるが、
ただ彼女たちに向かって身を投げ出すのではなく、自分を拡げて見せればいい。
もし、名の知れた女性が、お前の紙面にどうしても触れたいと言うなら、
あるいはお前の頁を精査したいと言うなら、
愛想のいいお前を見せてやれ、彼女らの眼に 25
よりふさわしい、いずれかの頁が記憶されるよう
もし、育ちの良い召使や心優しい娘が、お前の
愉しみごとをよくよく見ようとするならば、快く開陳してあげなさい。
言っておやり、私のご主人様こそ（彼女たちに惚れているのだから）、
そこにおられて目に留められてしかるべきと。 30
トーガを着た人たちのうち、私の知らない人でも知っている人でも、
学校で教えても、壇上で説教しても、
リクエイオンで学をなしても、細かい事どもを精査し、
よくよく見て、何らかの過ちを見出したのなら、
言えばいい、著者に好意を向けてやれ、不快を招いたと今ではわかっていて、 35
とても多くを取り除きたいと思っているのだからと。
もし、憂鬱な男、艶めかしい恋する男、
宮廷人でも一般市民でも。美しく着飾った男でも、騎士でも、誰でも、
こちらに来るなら、自分が読まれると信じて振る舞いなさい、
おそらく、育ちの悪い多くを彼らは読まないのだから。 40
彼らには忌避したいものには留意させるがいい。好むものすべて、
その頁が多分多くのことを差し出しうるのだから。
また、もし誰か医者がお前のところに現われたら、慎重にも

親しく振る舞い、粗相なきようにしなさい。

彼は、私の著作に、おそらく彼にとって 45
 軽微ではない援助をいくつも見出すのだから。
 もし、誰か弁護士がこの頁に行き当たるなら、
 あなたたちとは共通点は何もない。しごくくだらない輩よ、さらばだ、
 彼らが偽りもない熟練した法律家で、善き人間でないなら、
 ならば読むがいい、多分非常に博識であるだろうが、そうでないならば。 50
 もし、誰か賢くて、軽くて、寛大な読者が
 眼をこちらに向けるなら、その人は好きな頁を読むがいい、
 彼は誠実に許してくれる、何も恐れず喜んで開いてやりなさい、
 お前の粗など責めはせず、
 誉めてくれる点もあるだろうから。もし、磨かれ、洗練され、 55
 良く練られ文をと願っている下手な修辞家がやって来たら、
 直ちに閉じなさい、彼の好みに合致していないとして、
 無粋な言葉を一言も非難することがないのでなければ。
 もし、誰か凡人並みの詩人がやって来るなら、
 迎え入れなさい、彼はたくさんの作り話を読んでいるのだから。 60
 私も有象無象の一人、いかなるアポロンも私に靈感を授けはしない。
 誰だって、大口を叩く予言者などになれはしないのだ。
 もし、勝ち誇ったような批評家ぶる読者や、厄介な検閲官、
 ゾイロスやモモスども、激越な連中が来るなら、
 歯をむいて唸り、怒鳴ってやれ、拡げて見せてやることなどない、 65
 妬み深い輩が、悪意に満ちた冷笑で攻撃してくるならば。
 お逃げなさい、もしできることがなさそうなら
 声に出さず軽蔑し愚弄してやりなさい。
 唸り、吠え、叫び声で虚空を満たしてやりなさい、
 心配ご無用、彼らを喜ばすのは罪なのだから。 70
 真を為しなさい、もし、もっと純粋な客人がこちらに来たら。
 彼は機知や遊びや冗談が嫌いで、
 おまえの卑猥さや猥雑さが嫌いなのだ。言ってやれ、
 卑猥さがお前の主人で、快樂がお前のムーサだと、
 だが、全てを考慮すれば、卑猥さは実際にそうなのではなく、そうさせるもの、 75
 眞は卑猥でも、生活は潔癖。
 もし、野蛮で無学、粗野な見物人が、この収穫物の中に
 入り込んでくるなら、棍棒で奴らを追い払え。

愚か者は叩き出せ（と私は命じる）、だって愚か者に対して何ができるのか。
遊びや冗談が彼らの好みにあうのだ。 80
だが、楽しい表情をしている人は誰も追い出してはならない。
男も、女も、どんな人も、そちらから来る人でも、どこから来る人でも
誰でも来る人は歓迎しなさい。誰でも客人は
私に好意的でも厳しくても、大いに歓迎しなさい。
というのも、その人が非難するなら、非難したことは幾分は喜ばしかろう。 85
非難することが、私が後でもっと見直すことに繋がるだろう。
しかし、もし賞讃するなら、いかなる賞讃も、そこに連れて行ってはくれない。
この悪しきものには良いものを対置することで善しとしよう。
以上が、この小著に向けたと思うこと、
著者が発言すべきことである。 90

〈原註〉

29. 冗談に言ったもの、悪意あるものではないと理解されたい。

〈訳註〉

16. エラスムス『格言集』3. 2. 65.

76. ルティアリス『エピグラム集』1. 4. 8.、オウィディウス『悲しみの歌』参照。

憂鬱についての著者の概要：対話法で

既に知られた様々なことどもを考え、
独り沈思して歩んでいるとき、
悲しみもなく、恐れもなく、
甘美な幻を楽しみつつ、
虚空に城を築いているとき、 5
時はいとも早く過ぎゆくように思われる。

憂鬱に比べわが愉悦はすべて愚行、

憂鬱ほど甘美なものはなし。

自分のなした過ちを数えて
独り目覚めて横になっているとき、 10
そんなとき、わが想いがわれに君臨し、
恐怖と悲歎がわれを驚かせ、
ぐずぐずしていようと、ゆっくりながら歩もうと、

時はいとも遅く進むように思われる。

これに対してわが哀しみはみな喜び、 15

憂鬱ほど悲しいものはなし。

自分に演じ、笑いかけるとき、

愉しい考えで、時は私を欺く。

川の畔や緑豊かな木立のそばで、

聞いたことも求めたことも、見たこともない、 20

幾多の喜びが私を祝福し、

私の心に幸の冠を授ける。

他の私の愉悦はすべて愚行。

憂鬱ほど甘美なものはなし。

独り横たわろうと、座ろうと、歩こうと、 25

暗い森、陰鬱な洞で、

深々と呻いて、溜息をつき、悲しむ、

満たされることなく怒りあふれ、

一時に多くの悲惨が押し寄せて、

私の重い心と魂とを落ち着かせる。 30

これに対してわが哀しみはみな喜び、

憂鬱ほど辛いものはなし。

聴こえる気がする、見える気がする、

美しい音楽、素晴らしい旋律が、

素敵な町、館、街が、 35

今ここで、今度はそこで、世界はわがもの、

類稀な美女、煌びやかなご婦人方が輝き、

なんと麗しく神々しいことか、

これの他の愉悦はすべて愚行。

憂鬱ほど甘美なものはなし。 40

聴こえる気がする、見える気がする、

亡霊、悪鬼、悪霊が。わが幻影が

幾多の醜悪な姿を見せ、

頭のない熊、黒い男に猿、

悲し気な絶叫、恐ろしい光景が。 45

わが哀しく陰鬱な魂が戦慄する。

これに比べ、わが哀しみはみな喜び、

憂鬱ほど忌まわしきはなし。

言い寄り、口づけするように思える、
わが愛する人を抱擁するように思える。 50
ああ、幸なる日々よ、ああ、麗しき主題よ、
わが時は楽園で過ぎた、
こんな想いが今もわが想像を動かす、
だから、われがずっと愛のなかにいられるよう。
これに比べわが愉悦はすべて愚行、 55
憂鬱ほど甘美なものなし。
愛の多くの恐怖を、わが溜息と涙を
わが眠れぬ夜を、嫉妬の激情を
数えるとき、ああ、わが辛き運命、
今後悔するも、もはや遅すぎる。 60
苦痛のないのも愛と同じくらい悪く、
わが魂にはとても辛いとわかる。
これに比べわが哀しみはみな喜び、
憂鬱ほど酷いものはなし。
友や仲間は立ち去らせよ、 65
独りでいるのがわが望み、
わが想いとわれだけのときほど良きときはない、
自分の世界で主として振るまえ。
これと同じように宝石も他からも不要。
これこそがわが喜び、わが幸の最たるもの。 70
これに比べわが愉悦はすべて愚行、
憂鬱ほど甘美なものなし。
独りでいるのはわが唯一の悪疫、
我は獣、化け物と化した、
光もいらぬ、友もいらぬ、 75
今となってはそれは悲惨。
場面は変わった、わが喜びは失せた、
恐怖、不満、悲嘆がやってきた。
これに比べわが哀しみはすべて愚行、
憂鬱ほど荒々しいものはなし。 80
どの王とだって人生を交換したいとは思わない。
私は陶酔の境地。この世はもたらしてくれるか、
心地良いつまらぬことの、紛らす時間のなかで、

いつも笑い微笑む以上の歓びを。

するな、ああ、われを困らせるようなことをするな、 85

とても甘美な満足を、われは感じ知る。

これに比べ私の愉悦はすべて愚行、

憂鬱ほど神聖なものなし。

どんな娘とでも立場を交換しよう、

君は監獄からでも糞溜めからでも連れ出すことはできまいが。 90

わが苦悩は治癒叶わず、はたまた地獄でもあり、

この苦痛のうちに住まうことはできず、

今は絶望してわが人生を嫌悪する。

絞首索か短刀を貸してくれ。

これに比べ我が哀しみはみな喜び、 95

憂鬱ほど忌まわしきはなし。

* 太字表記は原文がラテン語、ギリシア語であることを示す。

* 原注には、典拠の該当箇所と、テキストの引用が見出される。典拠は [] 内に示し、テキストは訳出に反映し、必要と思われる部分は [] に補った。

* その他の補注や訳出の補完は 〈 〉 に示した。

テキスト

(底本) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Oxford English Text)* (6 Vols.). Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press, 1989-2000.

(参考) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Facsimile) (The English Experience)*. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes, Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction by Holbook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation and embodied in an All-English text*. Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell. London: Routledge, 1931.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation and embodied in an All-English text*. Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell. London: Routledge, 1931.

Burton, Robert. *Anatomie de la Melancolie* (3 Vols.). Traduction de Bernard Hoepffner et Catherine Goffaux, Préface de Jean Starobinski, postface de Jackie Pigeaud. Paris: José Corti, 2000.

既記

- 「第1部 第1章 第1節」 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 第59号 2007 所収
「第1部 第1章 第2、3節」 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 第60号 2008 所収
「第1部 第2章 第1節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第61号 2009 所収
「第1部 第2章 第2節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第62号 2010 所収
「第1部 第2章 第3節 第1-10項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第63号 2011 所収
「第1部 第2章 第3節 第11-14項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第64号 2012 所収
「第1部 第2章 第3節 第15節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第65号 2013 所収
「第1部 第2章 第4節 第1-6項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第66号 2014 所収
「第1部 第2章 第4節 第7項-第5節、第3章 第1節 第1・2項」
『京都府立大学学術報告 人文』 第67号 2015 所収
「第1部 第3章 第1節 第3・4項-第3節、第4章」
『京都府立大学学術報告 人文』 第68号 2016 所収
「第3部 第1章 第1節 第1項序-第2節 第2項」
『京都府立大学学術報告 人文』 第69号 2017 所収
「第3部 第1章 第2節 第3項-第2章 第2節 第1項」
『京都府立大学学術報告 人文』 第70号 2018 所収
「第3部 第2章 第2節 第2-3項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第71号 2019 所収
「第3部 第2章 第2節 第4-5項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第72号 2020 所収
「第3部 第2章 第3節 第1項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第73号 2021 所収
「第3部 第2章 第3節 第1項(承前)-第5節 第4項」
『京都府立大学学術報告 人文』 第74号 2022 所収

(2023年10月2日受理)

おかむら まきこ (文学部 共同研究員)
いとう ひろあき (専修大学 教授)